

287

2021 春号

拡がる建築家の職能・職域 ④

建築を超えて

FORUM

第4回 JIA 神奈川建築フォーラム

ソーシャルデザイングループ OSA

海外レポート

覗いてみました他人の流儀

建築ウォームアップ

良質な建築、これからのまちづくり

温故知新

日本型規制社会と知的生産

活動報告

わたしの愛用ツール

FORUM



多彩なLED技術と照明プランで 空間に最適なあかりを届ける

大光電機株式会社は、1926(大正15)年に大光電機製作所として創業。1948(昭和23)年に会社を設立し、照明のデザインから製造・販売まで一貫して行う、照明器具専門メーカーです。近年はLED照明のリーディングカンパニーとして、商空間・住空間のさまざまなシーンにマッチする、デザインや機能の優れた商品を数多く展開。全国に営業拠点とショールームがあり、お客様をサポートしています。また、JIAとは2006年から「建築家のあかりコンペ」を開催しています。大光電機のこれまでの歩みと、注力していることや取り扱い商品について、串間隆一常務にお話をうかがいました。

商業空間と住空間の あかり環境を提供する

当社は照明器具を製造・販売しているメーカーです。バブル崩壊後、業績が厳しい時に、現社長の前芝辰二が社長に就任し、会社を立て直すために社内改革を行いました。それまで明確でなかった経営戦略をきちんと打ち立て、この時から、事業の大きな柱を、飲食・物販などの商業施設関連の照明と住宅照明とし、これが当社の特色になっています。

社員教育にも力を入れ、社是に加え、経営理念と価値観を新たに掲げて、これらが書かれた小冊子(DAIKO WAY)を全社員が携帯し、朝礼などでも復唱することで、経営の軸を浸透させました。売上だけでなく、協調性や誠実性を大切に、お客様に真摯に提案する姿勢が大光電機の風土となり、それがお客様からの信頼につながり企業として成長してきました。

また、LED照明の商品化にもいち早く取り組み、現在はLED照明の開発・製造・販売を通して、より良いあかり



大光電機
本社ビル

環境を提供できるよう努めています。

照明デザイナーが ライティングプランを提案

商品開発や技術力だけでなく、照明のプランニングの提案にも注力しています。住宅では、以前は部屋の真ん中に照明器具を1つ付ければ十分でしたが、生活スタイルの変化や間取りが複雑になったことで、ダウンライトや間接照明を多用することが一般的になりました。その分、照明の配灯計画が難しくなり、取付方法ひとつで空間を台無しにしてしまうこともあります。

当社は照明計画を専門に行うTACT(Total Advance Creative Team)という部署があり、全国約110名の照明計画・特注設計のプロフェッショナルが、豊富な経験とノウハウをもとに、設計者や施主の方々がイメージする空間に適したライティングプランを提案しています。

TACTの住宅チームの先駆者である高木英敏や、造園の照明を得意とする花井架津彦など、デザイナーが個人名で活躍しているのも当社の特徴で、セミナーや本の出版を通して、照明業界の発展にも貢献しています。



屋外照明「ZEROシリーズ」施工例

好評の「ZEROシリーズ」 第3弾 約200点を開発中

現在、さまざまな機能をもつ付加価値の高い商品の開発・販売に力を入れています。住宅照明では、電球色・昼白色・温白色の3色に切り替えることができる「よくばりシリーズ」により、シーンに合わせてお好みの色味で生活していただくことができます。

また、大変好評の屋外照明「ZEROシリーズ」は、“重耐塩塗装”で、かつ、“塗装色は同一価格”が大きなウリで、重点商品、差別化商品として引き続き、注力していきます。現在、第3弾の新製品も開発中で、約200点の発表を予定しています。ぜひ、ご期待ください。

DAIKO 大光電機株式会社

www.lighting-daiko.co.jp

照明器具全般のデザインから製造・販売を行っています。

■本社

大阪市中央区高麗橋3-2-7 TEL: 06-6222-6240 FAX: 06-6222-6252

■ライティングコア東京(ショールーム/全国9カ所で展開)

東京都墨田区両国4-31-17 TEL: 03-5600-7780 FAX: 03-5600-7790

営業時間: 10:00~18:00 休館日: 土日祝日、振替休日、年末年始、夏期休暇

※ショールームは、新型コロナウイルス感染拡大防止対策として、事前に予約をお願いしています。



CONTENTS

COLONNADE

4 特集：拓がる建築家の職能・職域 ④

2020年度特集テーマ関連企画 特別シンポジウム「建築を超えて」

プレゼンテーション／クロストーク

登壇者 秋吉浩気 VUILD

寺田尚樹 インターオフィス、ノルジャパン、テラダデザイン一級建築士事務所、テラダモケイ

馬場正尊 Open A、東北芸術工科大学

進行役 寺田真理子 横浜国立大学大学院都市イノベーション研究院Y-GSA

FORUM

12 第4回 JIA神奈川建築フォーラム 旧横浜市庁舎の保全・活用から考える、街のサステナビリティー シンポジウム「旧横浜市庁舎の可能性について～20世紀建築の保存と活用を考える～」

田井勝馬建築設計工房 田井勝馬

14 連載：ソーシャルデザイングループOSA —その軌跡と展望— 第4回

命を守る住宅へ

OSAジャパン 坂田 泉

16 海外レポート バンデミックのニューヨークから未来を想う

南 惣一郎

18 覗いてみました他人の流儀 鶴巻和哉氏に聞く 好きなアニメーションをつくり続ける

Bulletin 編集WG

20 建築ウォームアップ —建築のはじまりかたを探る— 新しいコンペのあり方を求めて

関東学院大学／コンテンツポラリス 柳澤 潤

21 良質な建築、これからのまちづくり

建築・まちづくり支援プラットフォーム宮城

—宮城県内の建築関係4団体が連携し、中立的立場で自治体の相談に応える—

宮城県建築住宅センター 三浦俊徳

22 温故知新 まちをデザインすることは暮らしをデザインすること

工学院大学名誉教授／アーバン・ハウス都市建築研究所 倉田直道

23 抱負を語る 長く作っていくこと

佐久間達也空間計画所 佐久間達也

抱負を語る 今までのこと… これからのこと…

MY Architect Office 渡辺恭祥

24 連載：日本型規制社会と知的生産 —イタリアン・セオリーから学ぶもの— 第4回

個性や能力を十分に活かす社会をつくるためには

大倉富美雄デザイン事務所 大倉富美雄

28 活動報告 交流委員会Aグループ コロナ禍でのグループ活動 —協力会員アンケートを実施—

三谷セキサン 賀川昌一

29 交流委員会Eグループ 2020年のJIA活動を振り返って

—正会員と協力会員を結ぶ、オンライン技術セミナー実施に向けて—

きんでん 若佐明継

30 わたしの愛用ツール Pathfinderの旅行用カバン／「Twinmotion」と「InShot」

BACKYARD

31 ひといき 悦楽と癒し

スウィング 金山 大

31 編集後記

2 パートナーズアイ 大光電機株式会社 多彩なLED技術と照明プランで空間に最適なあかりを届ける

表紙写真：「まれびとの家」施工風景（設計 VUILD、2019年） 撮影 黒部駿人

公益社団法人 日本建築家協会 関東甲信越支部

〒150-0001 東京都渋谷区神宮前2-3-18 JIA館

Tel: 03-3408-8291(代) Fax: 03-3408-8294

<https://www.jia-kanto.org/>



2020年度特集テーマ関連企画 特別シンポジウム

建築を超えて

今年度は「拡がる建築家の職能・職域」をテーマに、従来の領域や分野を超えた多様な活動をされている方々にフォーカスを当てて特集してきました。最終回の今回は「建築を超えて」と題し、まさに「拡がる建築家の職能・職域」をご自身の活動を通して体現されている皆さまをお招きし、オンラインでシンポジウムを開催いたしました。

ご登壇者は、秋吉浩気さん、寺田尚樹さん、馬場正尊さんの3名、そして司会進行を寺田真理子さんにお願いしました。前半は、お一人ずつ、どのような「建築を超えた」活動をされているのか、後半は4名にクロストークを通して、建築家の在り方や表現方法などをお話していただきました。 (『Bulletin』編集長 会田友朗)

シンポジウム

開催日 2020年12月18日(金) 18:30~21:00 オンライン配信 (Zoom ウェビナー形式)

登壇者 秋吉浩気 アーキテクト/メタアーキテクト
VUILD代表取締役

寺田尚樹 建築家/デザイナー
インターオフィス代表取締役社長、ノルジャパン取締役上級副社長、
テラダデザイン一級建築士事務所主幹、テラダモケイ

上段左から 寺田真理子さん、寺田尚樹さん
下段左から 秋吉浩気さん、馬場正尊さん

馬場正尊 建築家
Open A代表取締役、東京R不動産ディレクター、
東北芸術工科大学教授、JIA正会員

司会・進行 寺田真理子 キュレーター
横浜国立大学大学院都市イノベーション研究院Y-GSA准教授、
Y-GSAスタジオ・マネージャー

主催 公益社団法人 日本建築家協会 関東甲信越支部 広報委員会

(このシンポジウムはNPO法人建築家教育推進機構の助成を受けて開催しました)



司会・進行

寺田(真) 寺田真理子と申します。今回、「拡がる建築家の職能・職域」というテーマでシンポジウムのお話をいただき、私自身横浜国立大学で建築教育に携わっておりますが、学生をはじめとする今の日本の若い人たちがこれから社会に出て行く時に、希望や勇気をもって建築の世界に飛び込み、新しい領域にチャレンジしてほしい、そのきっかけになればと思い、今回進行役として参加させていただくことになりました。

本日のご登壇者のお三方は、建築という分野に新しい価値観で、大変クリエイティブなお仕事をされておられます。私もお話をうかがえるのを楽しみにしておりました。

それでは、お一人ずつレクチャーをしていただきます。まずは馬場さんからお願いします。

プレゼンテーション

建築とメディアとムーブメント

馬場正尊 (Open A / 東北芸術工科大学)

僕の設計事務所Open Aは、Open Architectureのことで、建築の領域を開いていこうという意味と、コンピューター業界用語で行動を全部オープンにするという意味を兼ねています。iPhoneはOSが公開されているからこそ、世の中の人々が新しいアプリを開発できるように、方法論を公開することをOpen Architectureといい、まさにこれを実践しようとしています。

建築とメディアを掛け合わせることで、少し言い過ぎ



1階が駐車場、2階が食品倉庫として使われていた東日本橋の古いビルをリノベーションした初期のOpen A事務所（撮影：阿野太一）



泊まれる公園として再生した「INN THE PARK」（撮影：阪野貴也）



空間ができるプロセスの逆転（馬場）

かもしれませんがムーブメントを起こすようなことを標榜してやってきたのではないかなと今思っています。

大学院時代から、『A』という同人誌をつくっていました。大学院卒業後は広告会社に就職しましたが、その間もつくり続け、20代後半の時に会社を退職し、同人誌だった『A』を雑誌として4年間発行しました。これは建築と都市とサブカルチャーをつなぐような雑誌で、例えば宮崎駿さんに「あなたの都市論を聞きたい」という熱いラブレターを送り、この無名の雑誌のインタビューに答えてもらったりもしました。僕はその時、メディアは会いたい人に会い、やりたいことを考えるための魔法の絨毯だなと思ったのです。

その後、都心部で六本木ヒルズや丸ビルなどの超高層再開発が進む一方で、古い建物がどんどん余っていることに気がつきました。ちょうどその頃、アメリカに行き、捨て去られた中華街をギャラリー街に変えている若者や、廃墟となったデパートをギャラリーにリノベーションする人を取材してきました。そこで自分も古い建物のリノベーションに挑戦してみようと思い、最初は小さな空間を白く塗るところから始めました。リノベーションできそうな物件を探している時に見つけた面白い空き物件をブログで発表したら、「それ借りられないの?」という声が殺到して、これを機に仲間たちと「東京R不動産」を立ち上げます。今まで不動産屋が嫌っていたような物件を、違う価値観から紹介することで人気を得ることができました。リノベーションというムーブメントをドライブするひとつの役割を担ってくれたかなと思っています。

その後も、事務所がある神田・東日本橋の裏通りの空き物件をギャラリー化するようなアートイベントを10年間続け、気がつけばリノベーション物件も増え、まちの風景と歩く人が変わっていききました。これはもしかして新しいタイプの都市計画なのではないかと思い、「エリアリノベーション」と名付けました。今はそれが一人歩きして一般名詞のように使われていますが、まさに点が面になってエリアを変えていく、新しい都市計画の方法論のひとつとして意識するようになりました。

その次に変えたいと思ったのが公共空間です。禁止事項だらけの日本の公園を変えたい、プライベートとパブリックの中間領域である新しいコモンスペースをつくること自体が建築の役割なのではないかと考え、『RePUBLIC：公共空間のリノベーション』（学芸出版社、2013）という本を書きました。こうしたメディアや、実際に公園にポップアップのカフェを仮設でつくるプロジェクトなどを通じて、公共空間リノベーションのムーブメントをつくらうとしたんです。

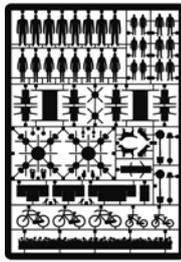
静岡県沼津市では、行政から廃墟のようにになっている少年自然の家を民間に貸したいという相談を受け、少年自然の家をリノベーションするだけでなく、その周りの公園も含めて宿泊施設であると見立てることで、泊まれる公園「INN THE PARK」として再生しました。重要だったのは公園の新しい活用方法を提案することだったので、森の中に球体テントを吊るして、そこに宿泊できるようにしました。これをきっかけに、この公園で映画祭をしたり、キャンプをしたり、いろいろなことが展開されるようになりました。ここはOpen Aが企画・設計だけではなく、ホテルの運営までしています。僕は自分がつくったものがきっかけになり、その空間を他者がどんどん拡張して使うようになることが嬉しいのです。Open Architecture、まさにオープンリソースとして空間が使われているような感覚を覚えます。

また、自分の空間を自分でつくれるようなプラットフォームをつくりたいと思い、「toolbox」という建材の販売サイトも10年前から運営しています。

近代は建築家が「計画」し、「つくって」から「使う」という順で物事は進んでいました。しかし今は、まず「使う」側の構想力があり、それを「つくり」、そしてそれを「計画」に還元するというように、物事の成り立ちが逆転しているのではないかという気がするのです。建築家は、近代では物事のスタートに立ち会うことができましたが、ポスト近代ではいちばん最後になってしまうかもしれません。ですから、僕は積極的に運営に関わったり、「toolbox」のようにつくることから建築を設計する、逆のルートを意識的にして新しい時代についていこうとしています。



最初に設計した住宅「T・HOUSE」



1/100 建築模型用添景セット



15.0%のアイスクリーム
スプーン (寺田)

さらに、今は建築家や大工さんや工務店と、それを使うユーザーなどの境界線がすごく曖昧になっていて、職能が溶け合いはじめているのではないかと思うようになりました。Open Architectureを標榜している身として、「つくる」ことと「使う」ことを横断しながら、いかにして都市や空間の当事者になり、それらに対してリアルなコミットメントができるかを考え、好奇心の赴くままに仕事をしているところです。

自分で企画してビジネスを展開する

寺田尚樹 (インターオフィス、ノルジャパン、
テラダデザイン一級建築士事務所、テラダモケイ)

僕は大学卒業後、ロンドンのAAスクールに行きました。日本だと建築家はやはり家をつくる人で、インテリアデザイナー、プロダクトデザイナーというように職能がかなり分かれています。ヨーロッパでは建築家が車やプロダクトのデザインをしたり、映画を撮ったり、クリエイティブな仕事はなんでもできるようなイメージがあったからです。

テラダデザインは僕が日本に帰ってきて立ち上げた建築設計事務所です。最初に設計した住宅が『新建築 住宅特集』に掲載され、表紙にもなりました。これでどんどん仕事がくると思ったのですが、ぜんぜん来ない。今思えばちょっとやりすぎたのかもしれません。その時に、自分の想いをぶつけるだけでは物事は実現できないと実感しました。そのあと設計した7階建てのテナントビルでは、看板の代わりにビルのファサードに大きなQRコードを付けました。テナントが変わるたびに看板を付け替えるよりも、QRコードの向こうのバーチャルな看板の情報を書き換える方がハンディで安だし、そのアプリの開発もしたりしました。

設計事務所では住宅やビル、オフィスのインテリア、サインデザインなどをしていたのですが、やはり日本で設計事務所というかたちでやると、建築の設計以外の分野になかなか出られない。そこで立ち上げたのがテラダモケイです。模型に添える人などの添景をプロダクト化

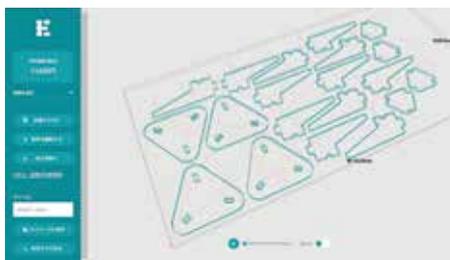
し、商品化しました。ハガキサイズの紙にレーザーカットで人などがかたどられていて、組み上げると1/100の小さな模型ができます。これを始めたことで、建築という請負仕事ではなく、自分で企画してブランドを立ち上げてデザインして売るといふ、建築の設計料とは違うかたちの収入ができ、ビジネスという実感が湧く仕事になりました。さらに、企業やメーカーのプロモーションのツールとして使いたいという話もくるようになり、新たなビジネスに変わってきました。

15.0%というブランドも展開しています。テラダモケイと同じように、企画を立てて、メーカーとコラボレーションし、デザインだけではなくて全体のブランドディレクションもしています。これは、富山県の高岡の鋳物工場から、鋳物の技術を使って何かつけれないかという相談を受けたのがきっかけです。アルミは鏡面に磨いた仕上げが難しいのですが、その技術でアイスクリームスプーンをつくることにしました。アルミは熱伝導率が高いので、手の熱がスプーンにすぐに伝わり、カチカチのアイスでも簡単に掬えます。

ここからの2つはこれまでと大きく変わるのですが、今、インターオフィスという、主にヨーロッパの高級ファニチャーを輸入販売する会社を任されています。それから、ノル(Knoll)というアメリカのブランドの日本法人の運営もしており、青山にあるショールームでは、ミース・ファン・デル・ローエのバルセロナチェアや、エーロ・サーリネンのテーブルや椅子などを展示・販売しています。これらの家具は以前はプロダクション品ばかりでしたが、本物を日本で紹介したいと思い、ノルに直接行って交渉してきました。僕以外にも日本のいろいろなところから交渉に来ていて、競争になったのですが、僕はお金の話は一切せずに、家具のバックグラウンドや建築家のことを語ることができたので、お前に任せるよと言ってもらえました。その時に、建築学科を出たことが役に立ったように思いました。僕は今、このように海外のメーカーに行つて輸入交渉をすることも仕事のひとつになっています。家具の開発の企画なども現在進めているところです。



ShopBotで家具をつくる中学生 (撮影：Shunsuke Anai)



クラウドサービス「EMARF」の操作画面



「まれびとの家」(2019) (撮影：Takumi Ota) (秋吉)

生き生きとした暮らしを自分自身でつくる

秋吉浩気 (VUILD)

私はVUILDという会社をやっています、建築家と名乗りながら、メタアーキテクトとも名乗っています。

学生時代は意匠系の研究室にいましたが、どんなコンペでも最優秀賞を取ってしまうような同期や先輩がいて、建築を考えることが少しゲーム化していて、コンペを取ることが次につながるという風潮を割と引いた目で見っていました。ちょうどその頃に東日本大震災があり、建築学を学んできた自分たちに何ができるのか考える時期がありました。どういう力があれば自分自身で社会に対して何かを訴求できるのかを考え、建築意匠であまり扱われていなかった、「情報技術」と、「社会に対してどのようにコミュニケーションしていくか」ということ、そして「ビジネス」、「ものづくり」という4つに整理しました。

ここの4つにアプローチするために、デジタルファブリケーションを学ぼうと、3Dプリンティングを研究している慶應義塾大学環境情報学部の田中浩也研究室に入り、2年間でデジタルデザインとメタデザインを習得しました。メタデザインとは、個人がデザインし、ものづくりする行為を支援する環境をつくることを指します。またこの2年間で、企業から協働研究費を獲得する経験をしたり、アイデアを実現するためのものづくりスキルを身につけ、そのまま独立しました。

2017年にVUILDを設立し、建築意匠を中心に据えながら、株式というかたちで事業会社・投資家から資金をいただき、そのリターンとして5年から10年かけて社会変革を起こす。このビジョンを理解してくださった株主と協働関係を結び、出資してもらって一緒に事業を行っています。

VUILDの事業は大きく分けて3つあります。1つ目に、デジタルデータでものづくりができる基盤を整えるために、ShopBotというデジタル加工機を3年間かけて全国63カ所(2021年2月現在)の製材所や工務店に導入してきました。2つ目に、一級建築士事務所としてデザインと施工をしています。3つ目として、デザインやものづく

りをサポートするようなソフトウェアの開発をしています。この3つの事業の連動によって会社をまわし、建築に関わることができる人を増やす、ひと言で言うと建築の民主化を掲げ、どこでも誰でも自分たちの地域の資源を使って、自分たちの力で理想の暮らしをつくっていきけるような社会を構築することをビジョンに掲げています。

ShopBotの導入先の多くは中山間地域なのですが、熊本県の南小国町では製材所にShopBotが入っていて、中学生がデータづくりを覚え、自分で材料を選んで家具をつくるという部活動を始めています。

一方で、一からデザインを教えて、制作までのいろいろなソフトを覚えてもらうのはかなり大変なので、先ほど3つ目の事業として話しましたが、専門的な加工の知識やデータづくりの知識がなくても、デザインデータをWebにアップすれば加工コード・見積りが自動生成される仕組みも開発しました。このプラットフォームは「EMARF」といい、今1,000人超のユーザーがいます。

今は、「EMARF」のデータが、ShopBotからもう少し大型の機械まで、すべてのデジタル加工機に接続できるように開発を進めています。また、CADがなくても素人がデザインしたものがつくれるインターフェースも開発していて、建築や家具をつくりたい時に、誰でも工房をもてるような仕組みをつくらうとしています。

また、より複雑な加工ができる大型の多軸加工機を2台導入し、これを使って今300㎡くらいの建築物を設計しています。一方で、住宅も設計していて、傾斜地を3Dスキャンで評価して、その形にふさわしい木部品を工場生産してユニット化し、建設しようとしています。こういう事例を通して、構築されたシステムをまた「EMARF」のシステムに戻していき、それをまたオープンにしていくというように、自分でつくりながらそれをどうやって民主化するかということ日々考えています。

2019年に竣工した「まれびとの家」という住宅では、自分たちで土地を探すところからやったのですが、地方に行くくと遊休資源がたくさんあり、森林資源も使ってくれという状況にあるので、そういう場所で住宅供給者、開発者としてどのようなことができるかという新規事業も新たな領域として取り組んでいるところです。

どのように職能・職域を拡張するか

寺田(真) ここからは皆さんに質問させていただきます。社会が変革し、時代が変わろうとしています。建築家はどのように個としての自分を拡張しながらものづくりをしていけばいいのでしょうか。コロナ禍の今、学生もなかなか人と話せないような状況が多く、いろいろな体験をしたくても外国にも行けないなかで、建築に対してどのように夢をもてばいいか悩んでいると思います。

馬場 今まさに社会と個人の関係性が変わってきている時期なのではないかという気がします。秋吉さんのレクチャーを聞いていても、いかに建築の専門性がない個人が空間をつくることにコミットできるかを模索しているように思います。それは僕もスタンスが近くて、「東京R不動産」は一般の人が面白い空間にアクセスする方法だし、「toolbox」も空間を自分で編集するための工具箱のようなものとしてつくりました。もしかしたらそこに大きなフィールドが広がっているのではないのでしょうか。

既存の建築教育では、建築家たる職能として、いかに建築をつくるかということをお教えいただき、とくに僕らの世代は個の表現をいかに建築として実現するのかということをお学びしました。ただ現代はどうも違って、僕たちはいろいろな人びとが空間をつくることに関わるフォーマットやシステムをつくること自体を建築と呼ぼうとしているような気がします。みんながハッピーになるいい空間をつくるというゴールは一緒なのだと思いますが、そこに到達する道筋は複数用意されているのではないかと今日の話をお聞いて改めて感じました。

だからといって、既存の建築教育やそこからの学びが古くなっているのかといえば決してそんなことはなくて、建築や空間をつくる基本的な知識や方法論を知っているからこそ、僕らはそこを軸に拡張することができるのだと思います。今は建築をつくることに対してとても自由な時期になっているのではないかとポジティブに感じています。

寺田 僕が建築家になりたい、ものをつくる仕事をしたいと思ったのは、自分が他の人とちょっと違う感覚や美意識を持っているのではないかと思ったからなんです。しかし、実際仕事を始めてみると、みんなと違う感覚を持っていると仕事にならないことがわかりました。とく

に住宅はそうです。ある程度みんなが共有できる感覚がないと難しい。プロダクトも同じで、プロダクトはある程度の数をつくって売っていきますから、マジョリティーというか、みんなに受け入れられるものをつくらないと仕事にならないのです。

ただ、テラダモケイの紙の模型やアイスクリームスプーンはどう考えてもマジョリティー側ではないですよ。昔は生まれることさえできなかったようなものでも、インターネットなど今の環境の中で、本当に共感できる少数の人とちゃんとつながれば、ものがつくることがわかりました。そこからだんだん広がっていくのです。だから馬場さんもおっしゃるように、だんだん自由になってきたのかなと感じます。インターオフィスやノルの家具は万人向けではありません。ですから、それも本当につながりたい人とつながるビジネスをしていかなくてはいけないと思っています。

寺田(真) 秋吉さんは我々より若い世代ですが、今の時代をどのように捉えていますか。

秋吉 最近学生の動きが面白くて、以前「まれびとの家」を手伝ってくれた横浜国立大学大学院Y-GSAの学生は、今埼玉県の小川町に移住して空き家を改修していますし、「EMARF」の利用者の半分は学生で、ちゃんとクライアントを見つけて、費用をもらって、「EMARF」で部品を出力して組み立てて納品しています。それから、最近僕らのところに新卒で入って来た人は、コロナ禍の今がチャンスということで、「移住してもいいですか」と言うので、「どこでも仕事はできるし、どこにでもShopBotはあるから好きにしな」と伝えました。建築のバックグラウンドと機械とPCさえあれば世の中動かさせちゃう、そういう面白い時代になってきています。本社機能を持たず、出社義務もない我々のメンバーたちも、そういう状況だと思います。

一級建築士は30数万人いても、そのうち約20万人はほぼ首都圏にいるという状況ですが、仕事のニーズや余白は首都圏よりも少し広いところにある気がしていて、埼玉に移住した学生に話を聞くと、そこには仕事が溢れていて、これつくってよと頼まれることもあるそうです。デザインができて、まちづくりもできて、ものづくりもできる。しかもコミュニケーション力と提案力もあって、絵にもできる。そんな人材はなかなかいません。地方都市はそういう人たちのフィールドとニーズに溢れているので、彼らは水を得た魚のように泳ぐのではないかなと、今後の動きが楽しみです。

馬場 その感じ、よくわかります。東北芸工大は山形にあるのですが、馬場研究室でも大学院生の時に起業して、新しい仕事をつくり出していくことそのものを論文にした人がいます。彼はコーヒー屋を起業しつつ街づくりの仕事をし、道路空間でのマルシェを社会実験として受注したりして、街の風景を変えるようなことを次から次へとやっていくんです。

地方都市は挑戦を求めているから、際立った活動をしやすく、かつそれを寛容に受け止める度量があるのだと思います。秋吉さんの話にあった、Y-GSAの学生が小川町に行ったら即戦力になるという社会は面白い。講義が全部リモートになり、大学に行かなくてもよくなった瞬間に、日本各地で面白い実践をしながら大学教育も受けられるという現象が起こるはずで、パンドラの箱はずでに開いているのではないのでしょうか。

寺田(真) オンラインで学生もやる気をなくして悩んでいるのではないかと思っていたところ、今の話を聞いて安心しました。

これからの建築家の在り方

寺田(真) 社会が変革して、人口も生産者も減り、一方で空き家が増え続けている中で、建築家、また建築教育は、これまでの既存の枠組みにとらわれない新しい価値感をどのように社会の中に見出していくかが非常に重要ではないかと思っています。

秋吉さんは建築論壇で建築教育について、「垂直的な統合的な建築家」と「水平分散型建築家」ということを書かれています。これからの建築家の在り方をどのように考えていますか。

秋吉 学生は影響を受けやすく、「起業すればいいんだ」と、手法に注目しがちなところがあります。学生の卒業設計などの講評会を聞いていても、何か目先の社会問題を解決するためのデザインのようになってしまうと感じました。僕もプレゼンテーションではあたかも課題解決のためにやりましたと話すことがありますが、最初はこういうことをやってみたら面白いんじゃないかと考え、その積み重ねの中で自分なりのビジョンが生まれ、その先に社会にこういうベネフィットがあるんだと言えることがあると思うのです。そこを勘違いして、2、3年の短期的な課題解決型のデザインが多くなってきて

しまっているのは問題だと感じています。

やはり、どれだけ自分のやりたいことができたのか、深掘りできるか。それを、その先共有したり、世の中に広げるための手法として、事業や会社、お金があるので。建築の領域を拓けた先に何かがあるのかということが大事だと思います。自分は誰もが表現者だと思っているし、自分自身もその中で楽しんで表現できる表現者でありたいです。

垂直型のスターアーキテクトも、もともとは単体の建築を通して世の中を良くして未来につなげたいという思いはあるのでしょうか。その思いを遠くに飛ばすために、建築の外に水平展開させていく、オープンにしていく。そうすることにより、一般の人の個のレベルが上がり、公共性やデザイン、またプロの仕事に対する理解度が上がるのです。そこではじめて、プロフェッショナルなデザイナーやアーキテクトの勝負になってくるのではないのでしょうか。ですから、建築家はただ領域を拓けていろいろな事業をやればいいという話ではありません。そこをはき違えている人に会うことが多いので、間違えないでほしいです。

馬場 大きな社会の問題は個人の中にこそある、という気がします。僕自身、大きな社会問題を解決しようというよりも、「R不動産」も「toolbox」も自分の好奇心や問題意識を追求するという、極めて個人的なところから始まっています。ただ、自分が切実にほしいものや、解決したいと思っているものは、案外たくさんの方が同じように思っていたりするんですね。個人の中にこそ実はマスが存在している気がするので、いきなり社会の課題を解決しようとするのではなく、まず自分の中の問題意識に対して素直になるということではないのでしょうか。社会的課題を解決するぞ！と大上段に構えると、何かを見失ってしまいそうです。自分の中の問題意識に積極的に向き合っ、それをきちんと表明していくことから丁寧にやっていると、それが社会の課題の解決につながっていくのではないかと思います。

寺田(真) 馬場さんは大学で学生にどのような設計課題を出したりしていますか。

馬場 建築を設計するという基本的なスキルや思考を得るにはオーソドックスな課題も絶対に必要だと思うので、図書館の設計なども当然やります。同時に、コロナ禍で授業が全部リモートになった時は、自分の家とそこを中心にした半径200mのエリアをリサーチして、エリアリノベーションしようという課題を出しました。自

分の家もその地域に貢献し、還元できるような何かにリノベーションし、そのリサーチとエリアリノベーションをCGと5分の映像でプレゼンするというものでした。

この課題を出した理由は、まず自分が主体となって、自分の周りの空間を考えたり動かしたりすることを学んでほしかったというのが1つ目の理由で、それを映像という新しい手段でプレゼンテーションしてほしいというのが2つ目の理由です。新しい気づきを誘発するような課題を出すように工夫しています。

寺田(真) 学生の好奇心や関心を引き出しながら、建築を考えるということも課題に込めなくてはならない。教える側の建築を考える目線も問われていますよね。
寺田さんは家具のレクチャーでのメッセージはどのようなものでしたか。

寺田 僕は主にモダンファニチャーの歴史をレクチャーしていましたが、そこで話すことは僕の勝手な解釈なんです。作品から自分なりに解釈していくと、建築家やデザイナーの生き方や家具の成り立ちが見えてきます。先ほど個人の興味という話もありましたが、名作と言われる家具にはどう考えても合理的でないものがたくさんありますし、やはり個人の興味が爆発しているからこそ個人的なものできたのだと思います。社会問題を解決することだけを意識していたら、ああいった家具は生まれていないでしょう。

僕が建築教育を受けた時は、社会問題を解決するとか、それを見つけることが卒業設計のほぼすべてのような感じでした。でも、自分の興味のあるものや、そこに強引にもっていくくらいのエネルギーがないと面白くないですよ。今の学生さんは自分の内面を出すのが恥ずかしがる人が多いような気がします。

馬場 個人の興味に忠実に深く掘っていくことでも社会にちゃんと到達しますよね。それが得意な人は、掘った先で社会にぶつかればいいのではないのでしょうか。

寺田 やはり掘り進んでいくとどこかに到達しますよね。僕は垂直に深く掘っていくタイプですが、掘り進んでいくと次のきっかけが生まれ、その連鎖反応が面白いのです。何かプロジェクトをしても、ひとつやると新しい展開や新しい人との出会いがあり、その繰り返しで僕はここまで来たような気がします。

表現する上で大事にしていること

寺田(真) 皆さん時代を読みながら、これまでの既存の枠組みへの問いを形にして表現するのが巧みで、それが共感を得るのかなと思いました。表現する上で大事にしていることはありますか。

秋吉 最初に完成形をつくらないことですね。粗い状態でも、すごく下手くそな仕上がりでも、素早く世の中に出して失敗を恐れないことです。失敗した数ほどフィードバックをもらえるし、フィードバックをもらった人ほど成長すると思います。1年かけて1個の作品をつくるより、1年中毎日作品を出してそれをアップデートしたほうが、より多くの経験になります。臨機応変にフィードバックして変えていくアジャイルな姿勢を、ものづくりにおいても生き方においてもかなり重要視しています。

デジタルの弊害は完成したものをつくり込まないといけないことで、例えばデジタルファブリケーションもそうです。でもそういう弊害を意識すると、完成していないラフな状態でいかに世の中に出して伝えられるかが、このデジタルの解像度が高い時代において、とても重要なことだと思うのです。

寺田 秋吉さんは人を巻き込むのが上手ですね。あるきっかけをつくり、それを失敗も含めていろいろな人がやることで、自分がやらずとも全体の経験値を上げている。そこがすごく面白いです。

馬場 僕も秋吉さんと同じです。情報は発信するところに集まると思っていて、社会に問いかけるような感覚で建築をつくってみたり、メディアをつくってみたりしています。自分で本などメディアをつくって問いかけて、いろいろなりアクションをもらう中で、「そんなことを言うなら、この公園をリノベーションしてみよ」などと相談がきて、そのフィードバックとして建築をつくって社会に提示するというような。回答を出すことが、再び次の問いかけになっていくようなことを永遠繰り返している気がします。そういう意味では、アジャイルな発想を少し長期スパンでダイナミックに仕掛けている感じでしょうか。僕の中では建築をつくることもメディアをつくることも、「これどう？」と社会に問いかけ続けているような感覚です。

寺田 僕は自分への問いかけが、結果的に社会に問いかけていることになるくらいが気楽でいいです。

馬場 そうかもしれません。どうしてもレクチャーで話すと、うまくいった話ばかりになりますよね。でもその

裏には、やってみてダメだったことがみんなゴロゴロしているはずなんです(笑)。

秋吉 問いかけには、無責任な問いかけとそうでない問いかけがあって、最近の大御所建築家は無責任な問いかけだけして何もしない人が多い気がします。馬場さんは、問いかけをして自分でもやっているの、ムーブメントにつながるのだと思います。

学生に向けて

寺田(真) ここでJIA学生会員の長谷川さんにつなぎます。

長谷川(学生) JIA学生会員の長谷川理奈です。今、10人くらいの仲間と一緒に暮らしながら空き家を改修しています。今日は私たち学生からも質問させていただきます。

杉山(学生) 芝浦工業大学4年の杉山真道です。本日は貴重なお話をありがとうございます。先ほど失敗を恐れないことというお話がありましたが、皆さんのうまくいかなかった話を聞かせていただけますか。

寺田 僕の最初の建築作品は雑誌の表紙にはなりましたが、設計事務所の経営的には大失敗ですよ。でもやりきったことは自信になるし、失敗も必ず糧になります。

馬場 僕は学生時代に子どもができて結婚をしたので、貧乏のどん底で、設備事務所でフルタイムで働いていましたが、その時お世話になった人が今ではOpen Aの設備設計を支えてくれています。とにかく必死にやっていると、失敗もプラスになっていることが多いです。

秋吉 私もたくさん失敗していて言えないことの方が多いのですが、例えば1作目の「まれびとの家」は雨漏りしていて時々直しています。これは自分たちも出資して共同所有している建物なのですが、建築家が最初に自邸を設計するのはそういうことかと思ったりしました。

「失敗しちゃった」と言えるのが20代だと思いますし、とくに学生は社会からサポート受けやすい立場ですから、好きなことをやればいいと思います。

寺田(真) 最後に今回のテーマ「拡張する建築家の職能・職域」に対してひと言いただけますでしょうか。

馬場 建築という言葉や領域や表現は素晴らしいし、大好きです。でも建築という呪縛にしばられすぎても面白くないので、やはり自分のやりたいこと、もしくはやるべきこと、やれることを発見してとりあえずどんどんやってみる。躊躇しているだけもったいないですから。



学生ともオンラインでつなぎ、質問に答えていただいた

建築単体をつくる時も実は同じだと思います。うまくいかないこともあります、それを繰り返すことを前提にチャレンジする。どれだけ繰り返せたかが力になっていくのではないのでしょうか。それを楽しんでやってみてください。

秋吉 馬場さんの言われた通りで、それをやれる勇氣がある人が、結果的にすごい建築家になっているのだと思います。

教育の面で言うと、建築的思考には戦略思考的側面があると思うのですが、戦略が練れてビジョンはつくれても、実行するスキルや行動力は教えられていないのが問題だと思っています。ビジネスや企業やお金はただの手段だし、使えるものは使ったらいい。そういうアクセスと手段をきちんと大人が教えないといけません、それがあまりにも教育の現場にないような気がします。

寺田(真) 教育って本当に重要で、社会が変わる中で教える側も意識を変えていかなくてはいけないと秋吉さんの言葉を聞いて再認識しました。

馬場 全く同感です。

寺田 建築家はやはり表現者であるということだと思うので、自分を出すことを恥ずかしがっているようだったらやめてしまったほうがいいと僕は思います。自分を表現する手段として建築があるわけなので、建築ではなくて他の手段で表現した方がいい場合は他の表現を使えばいいだけです。建築をやるのが目的ではなくて、自分の考えや思いをいかに伝えるかを目的にすればいいのでしょうか。

寺田(真) ありがとうございます。表現者としてどう歩んでいるか、そして自分の問題こそが社会の問題につながるというのは、まさにそうだと思います。それから、最後に秋吉さんもおっしゃっていたように、これからの建築教育そのものもやはり問われている時代なので、そこはみんなで考えていければと思います。本日はどうもありがとうございました。

第4回 JIA 神奈川建築フォーラム

—旧横浜市庁舎の保全・活用から考える、街のサステナビリティ—

シンポジウム

「旧横浜市庁舎の可能性について ～20世紀建築の保存と活用を考える～」

日程：2020年12月12日(土)

場所：横浜市役所1階 市民協働推進センタースペースA・B(オンライン同時開催)



神奈川地域会
副代表
田井勝馬

昨年12月、「第4回JIA神奈川建築フォーラム」と題し、横浜市庁舎においてシンポジウムが開催された。今回、横浜市庁舎移転に伴い、横浜市、横浜歴史資産調査会、JIA神奈川の三団体が共催し、「歴史を生かしたまちづくりセミナー(シンポジウム1)+JIA神奈川建築フォーラム(シンポジウム2)」を企画。会場は徹底した人数制限と感染防止対策を施し、同時にオンライン配信も行った。

12月5日に開催した「シンポジウム1」は、「旧横浜市庁舎の歴史・文化的価値を探る!」と題し、旧横浜市庁舎にフォーカスした企画を行い、松隈洋氏(京都工芸繊維大学教授)、吉田綱市氏(横浜国立大学名誉教授)、内田青蔵氏(神奈川大学教授)が登壇した。

続く12月12日に開催した「シンポジウム2」は、「旧横浜市庁舎の可能性について～20世紀建築の保存と活用を考える」と題し、20世紀建築をより俯瞰的に見た上での保全・活用にフォーカスしたシンポジウムを企画した。

以下、JIA神奈川が中心となって企画した「シンポジウム2」について報告する。

はじめにJIA神奈川の小泉雅生代表より、旧市庁舎の建築家の功績を巡る展覧会とも連携しつつ、旧市庁舎跡地利用をはじめ、20世紀建築の保存活用を再考することで、サステナブルな建築・まちの課題と可能性について議論したい旨の説明がされた。

第1部 シンポジウム

第1部は、渡邊研司氏(東海大学教授/DOCOMOMO japan代表)と青木健氏(三井不動産 関内プロジェクト推進準備室室長)、関谷和則氏(竹中工務店東京本店設計部



第1部 シンポジウムの様子

ISD部門グループ長)、梶山祐実氏(横浜市都市整備局 都市デザイン室長)を迎え、それぞれからテーマに沿ったレクチャーをいただいた。司会はJIA神奈川の田井が務めた。

20世紀建築の保存とリユース(活用と再利用)について ～DOCOMOMOの取り組み/渡邊研司氏

渡邊氏は、モダニズム建築とは何か? DOCOMOMOの保存活動について話をされた。建築はその時代の思想、技術、芸術、生活が反映されたもの。その街が歴史の記憶喪失にならないためにも、当時の建築に光を当て、建築家の想いと想像力を未来に繋げることが20世紀建築の保存活用に繋がるのではないかと説かれた。また戦前の様式建築の保存・活用は広く認識されてきているが、これからは戦後の近代建築の保存・活用が課題となるのでは、との指摘もあった。



歴史的建造物の保全活用を推進する手法 (エリアコンセプトブックの活用について)/梶山祐実氏

梶山氏からは、歴史的建造物の保全活用に向けた取り組みにおいて、新たなまちづくりの方向性を示す「AREA CONCEPT BOOK」の活用方法が説明された。そして、市民、事業者、行政が共に議論することにより、横浜らしい景観や目標を設定し、アイデアを出し合いながら魅力と個性のある質の高い景観づくりを行う「創造的協議」という方法が、横浜の景観づくりの最大の特徴であることも力説された。



旧市庁舎街区プロジェクトにおける 「継承」「再生」「創造」について/青木健氏

青木氏には、関内地区全体のまちづくり開発目標と理念、将来像をマクロ的に語っていただいた。中でも「まちづくりの理念」はどのまちでも普遍であるべきで、それぞれの街が持つ歴史的・文化的背景に応じて、「継承」「再生」「創造」することが重要であると説かれた。そして関内から関外地区へと創造的・経済的活動が生ま



れる持続可能な街を、ハード・ソフトの両面から目指したいとの強い想いが示された。

旧横浜市庁舎の可能性について／関谷和則氏

関谷氏からは、旧横浜市庁舎の市民広間は解体されるが、村野藤吾の想いである市民に開かれた場の創出として、商業建築を介し「賑わいのあるまちづくり」を目指し、新たな「しかけ」として、ハードとソフトを兼ね備えた市民広間を提案する。また、保存活用する行政棟は、市民の記憶を残したレガシーホテルとして新たに再生・創造する旨の説明がされた。



第2部 パネルディスカッション

第2部は、会場からの質疑を交えたパネルディスカッションとなった。

会場からは、跡地利用による街並み景観の変貌において、容積率と高層棟の高さの見解について質疑が上がった。青木氏からは、容積を最大限確保することが重要ではなく、地域と周辺環境のポテンシャルを生かした利用こそがこれからの社会に応えるものであり、横浜市とも景観に相応した高さを協議していると説明があった。また関谷氏からは、建設当時とは反対側からのアプローチによる賑わいの創出、新たなデッキレベルでの歩行者動線の確保と商業施設を取り込んだ賑わいの創出について、図面をもとに具体的な話が付加された。その一方で、商業施設に依存した開発への疑問の声も上がった。旧市庁舎の「設計者の想い」が、商業という新たな「しかけ」によって継承されるのか、子どもたちから老人までみんなが集える市民広間は再生されるのか、という不安の声も……。

今回のシンポジウムを通して、「誰のための市民広間なのか」「子どもからお年寄りまで集える施設ができるのか」といった多くの意見が脳裏に焼き付いている。また商業施設の「しかけ」は、地域の商いを誘導できるのか、資本主義に任せた店舗セレクトになりはしないか。村野が望んでいた市民中心のあり方と、新たに創出される施設のあり方を私たち市民は最後まで見届けなければいけない。またその一方で、私たち市民の課題も浮き彫りになった。私たちは、建築やこの街に対する自負心がどれだけあるのだろうか。自負心の欠如は取りもなおさず近代建築の保存意識の低さにも繋がっていくのではないか。建築だけではなくあらゆることにおいて言えることだが、単に情熱に差があるようにも思える。市民・事業者・行政を交えての議論、まさしく創造的協議が今後の横浜のまちづくりに大きな影響を与えるものと改めて確信した。

村野藤吾展 ー旧横浜市庁舎の建築家ー

日程：2020年10月30日(金)～12月27日(日)

場所：BankART KAI KO

今回、横浜市内で建築に関する展覧会や講演会が相次いで開催された。M meets Mと称して同時開催されたのが村野藤吾展と楨文彦展である。「村野藤吾展ー旧横浜市庁舎の建築家ー」は、旧帝



村野藤吾展の会場展示風景

蚕倉庫内のBankART KAIKOのオープニングにあたる。京都工芸繊維大学美術工芸資料館の協力の下、JIA神奈川、神奈川建築士会をはじめ建築関係者の熱意で、村野藤吾の代表作模型、写真、および旧横浜市庁舎の原図やスケッチ等が数多く展示され、とても見応えのある内容であった。中でもひととき目を引いたのが、旧横浜市庁舎の原図の数々、手摺り原寸図、そして天井レリーフのエスキースであった。現在デジタル化が当たり前の時代において、美濃紙に丁寧に描かれた図面、何本もの鉛筆の線が描く優しい曲線は、まさに設計者の想いや息遣い、執着心が感じられた。

また展示には、村野藤吾本人の設計への想い「ことば」が示されたパネルもあった。例えばディテールについて、「ジョイント部分にワンクッションにおいて、お互いにぶつかり合わないで共存するようなディテールにすれば、その建物で生活する人々の心が和み、人と人の心が触れ合いトゲトゲしさが無くなって平和になると思いますよ」。以前、恩師に「建築をどう創るかは、どう生きるかだ」と言われたことを思い出した。まさに村野は、設計を愛し、社会を愛し、人を愛した生き方であり、創り方だったのだと。旧横浜市庁舎の市民広間の設計思想は、まさに彼の「市民への愛」が表徴されているのだと改めて感じた。

今回、旧市庁舎行政棟は保全・活用されることになった。村野の設計思想に想いを馳せて関心を持つこと、保存意識を持つことは、新しい建築をつくる際にも歴史に耐える建築としての意識となると感じた。

「社会的条件は、非常に変わっていくことでしょう。それに対応してやっていくには、一つのことだけ言ったり、理屈だけ言ってもダメですよ。絶えず「サムシング・ニュー」これをやらないと……」

村野藤吾より、私たちに想いを託されたようにも聞こえた。

命を守る住宅へ



JIA国際委員会
一般社団法人
OSA ジャパン
坂田 泉

命を守れない住宅

ナイロビで雨季になると頻発するのが、アパートの倒壊。原因はさまざまだが、まず指摘できるのはアパートの躯体の脆弱性。その背景には、構造基準を守らない、施工品質が悪い、不当な増築を重ねる、といった背景が指摘できる。



頻発するアパートの倒壊
(BBC NEWS 2017年6月)

こうした状況を改善するためには、住宅建築の施工や工事監理に関わる人材の育成が重要ということで、私たちは、2018年7月から2019年9月まで、JICAの資金により、ケニアにおける「住宅建築人材育成事業」の調査を行った^(注1)。

人材の育成と同時に重要なのが、住宅の構造体の脆弱性を改善するための技術的アプローチ。例えば、安価で高品質なコンクリートの構造体を工場で製造する「プレキャストコンクリート工法」の導入に私たちは着目している。

ケニアにおける建築の構造方式は圧倒的に「ラーメン構造」が多い。柱、梁、床を鉄筋コンクリートで施工し、非耐力壁は内部も外部も石積みというパターン。内部の石積壁は、設備配管施工時に穴を開けられ、削られ、配管はモルタルで塗り込められ、漏水、メンテナンス不良など、配管トラブルの原因となっている。このような配管では、仮に都市レベルでインフラの整備が進んだとしても、住民のライフラインとなる末端の設備機器が持続的に本来の性能を発揮するのは難しい。

「命を守る」という観点から見た時、ケニアの住宅の状況は、人材、工法、設備の点で改善すべき大きな課題を抱えている。



石積壁に埋め込まれる設備配管

Affordable Housing とは

さらに、ケニアの住宅において大きな課題となるのは、そのコストである。現職のウフル・ケニヤッタ大統領は、第2期目の就任時の2017年、今後5年間の4つの最優先課題『Big Four』の中で、「Universal Health Coverage(健康)」、「Manufacturing(工業)」、「Food Security(食)」と共に、「Affordable Housing(住宅)」を掲げ、国民に50万戸^(注2)の住宅を提供することを約束している。



Affordable Housing への政府指標と実例展示 (2018年11月)

政府は、「Affordable Housing」の標準プランや販売価格などの指標を設定すると共に、その実例の展示場も開設している。政府指標によれば、例えば、30㎡のOne Bedroomタイプの販売価格は約1,000,000円(1ケニアシリング=1円で換算)、仮に建設工事費を800,000円とすれば、㎡単価は26,000円。日本の一般的なRC造による共同住宅の10分の1という感じだろう^(注3)。実例展示場には、例えば、中国のメーカーによる発砲スチロールを使った工法などで、この価格帯をクリアしたものもあるが、日本の建設業者にとってほとんど到達不可能な領域である。「Affordable Housing」を、「Low Cost Housing」、つまり、「建設工事費の低価格化」と捉えると、日本勢にはまったく競争力はない。

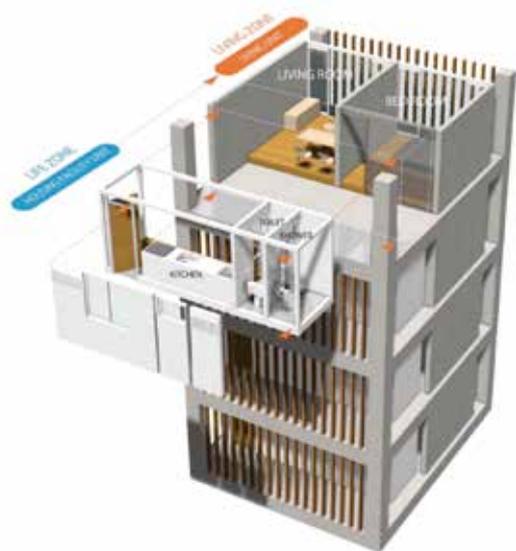
設備分離型共同住宅

住宅は「高い」だけでなく、「長い」買いものである。日本勢がケニアにおける「Affordable Housing」に取り組むとすれば、建設工事費のような一時的なコストではなく、建設後、持続的に発生するコスト(つまり、ライフサイクルコスト)の軽減と長い目で見た価値の形成というアプローチを取るべきだろう。

住宅の価値の究極は「命を守る」ことである。私たちは、「命を守る住宅」に対して、住民のライフラインとなる住宅設備と、住宅本体のそれぞれに異なるアプローチを取るべく、「設備分離型共同住宅」に取り組んでいる。

「設備分離型共同住宅」は、通常の生活のための「リビングゾーン」から分離された「ライフゾーン」に、水、電気、衛生、温熱といった命に直結する設備機器をプレファブユニット化した「住宅設備ユニット」を導入するものだ。そのねらいは、住宅における長い時間軸でのコスト削減と価値形成にある。主な特徴は以下のとおりである。

- 1) 「住宅設備ユニット」は初期の工事費には含めず、建主に長期リースすることで、初期の建設コストを軽減する
- 2) 「住宅設備ユニット」は住宅本体とは分離されているので、設備機器のメンテナンス、更新が容易なため、ライフサイクルコストの軽減、設備機器の長寿命化にも貢献する
- 3) 「住宅設備ユニット」には、IoT技術による遠隔操作・管理機能が与えられ、水、電気、ガス等の料金は「従量課金制」で、居住者が支払いやすい仕組みとする



「設備分離型共同住宅」プロトタイプモデル (設計：OSA)

命を守る住宅へ

この「設備分離型共同住宅」の最大の特徴は、住民の命に直結する住宅設備をプレファブユニットとして分離した点にある。分離することによって、水、エネルギー、温熱の供給といった従来の住宅設備の機能だけでなく、IoT等の最新技術により、住民の健康管理や医療、医薬サービスとの連携機能を付加することも可能になる。

例えば、「住宅設備ユニット」のトイレに搭載される予定の「健康管理モニタリングシステム」は、住民の尿から健康状態を感知し、病気の早期発見、予防につながるサービスを提供するためのものである^(注4)。このシステムをオンラインによる医療カウンセリング、医薬品デリバリーサービスにつなげることで、住民の健康管理はさらに充実したものとなる。こうしたデジタル技術によって、住宅を住民自身による健康管理、在宅治療 (Self-Medication) の最前線にすることは、病院や薬局へのアクセスが難しいアフリカにおいては大きなインパクトがある。

コロナ後の世界では、「命を守る」ことがアフリカだけでなく、先進国の住宅においても求められるようになるだろう。私たちは、コロナ後の世界における先進国の住宅も視野に入れながら、まずはアフリカを舞台に、「設備分離型共同住宅」による「命を守る住宅」を目指していく。

その第一歩として、私たちは、株式会社フジタと共に、2019年、2020年の2年度にわたり、国交省の「住宅建築技術国際展開支援事業」に応募、採択され、「設備分離型共同住宅」のケニアにおけるパイロットプロジェクトの実施に向けて技術検証を進めている^(注5)。新型コロナウイルスの影響は大きい。しかし、ケニア側カウンターパートは、私の「古巣」、ジョモ・ケニヤッタ農工大学建築学部をはじめ、長年のパートナーばかり。今まで築いてきた信頼を軸にこの難局を乗り越えるつもりだ。その成果については、また別の機会に改めて、ご報告したい。



ジョモ・ケニヤッタ農工大学建築学部スタッフと (2019年12月)

〈注〉

- 1: 2017年度JICA「案件化調査」採択事業(株式会社ブレインワークスとの提携)
- 2: 『Big Four』については、<http://www.president.go.ke>を参照されたい。
- 3: 国交省「建築着工統計調査/住宅着工統計」2019年による。
- 4: 「トイレ設置型健康管理モニタリングシステム」については、サイマックス株式会社ホームページ (<https://symax.jp/>)を参照のこと。
- 5: 国交省2019年度、2020年度「住宅建築技術国際展開支援事業」採択案件

パンデミックのニューヨークから未来を想う



南 惣一郎

おそらく時代の大きな転換期になる今般のパンデミックの只中において、さまざまな立場からこの状況を直視することは、この時代を生きている我々にとって必要不可欠であり、生死にかかわる問題であるがため、自分の人生の立脚点を素直に問い直す絶好の機会であろう。

かの辰野金吾は今から約100年前の1919年3月25日に64歳で亡くなっている。奇しくもスペイン風邪が猛威を振った時代であり、世界中で5,000万人以上の死者数が記録されている。辰野金吾もこの病魔によって亡くなった1人である。

ここで辰野金吾が生まれ育った時代を改めて再確認してみたい。辰野金吾の幼少期は、政治を動かす者の多くは、薩摩、長州、肥前などの限られた藩の出身者で占められるという社会的不公平感が蔓延しており、旧勢力と新興勢力の覇権争いで日本は分断されていた。また一方で、海外からは西欧列国の帝国主義にさらされており、日清日露戦争に追い込まれ、その後、世界初の大戦である第一次世界大戦が勃発している。

このように辰野金吾が生きた時代は、戦争に次ぐ戦争に巻き込まれた時代であり、その状況下で東京駅丸の内駅舎や日本銀行などの名建築を残している。我々が生きている現代社会とは比べものにならないほど、厳しい時代下での建築活動だったのである。

辰野金吾は晩年に長男から、本人がつくった多くの建築物の中で気に入った建物を聞かれ、「一つもない。俺は一生懸命やったがダメだったなあ」と答えたそうである。この言葉は、彼の志の高さを表すだけでなく、たび重なる戦争で人間の死を直視することにより、人間は有限であり、またその人間のつくる建築物も有限であるという、ごく当たり前のことを肌感覚でわかっていた辰野金吾の謙虚な気持ちが流れていたのではと思うのである。

マンハッタンは、2020年3月よりロックダウンされ、レストランをはじめブロードウェイなどのエンターテインメントがすべて止まってしまった。毎年5,000万人訪れていた観光客は、ほぼゼロになり、マンハッタン

の人口の20%以上が郊外に避難し、リモートワークの普及によりウォール街やミッドタウンなどのオフィス街は人影がなくなってしまう。



人のいないマンハッタンのグランドセントラル駅

それとは反対に、マンハッタンの中心地にある341ヘクタールにも及ぶ広大なセントラルパークでは、例年よりも青々と、もみの木や赤杉が生い茂り、鳥やリスなどの小動物は元気いっぱい走り回っている。

私は2000年にニューヨークに移住し、日本企業の米国進出のお手伝いをするコンサルティング会社を経営している。この20年で世界中の方々と触れ合う機会に恵まれてきた。そこで感じた日本人および外国人の考え方に触れたいと思う。

ニューヨークに来て間もない頃から、いろいろとお世話になっているユダヤ人の友人は、第二次世界大戦後、イスラエルからニューヨークに家族で移り住み、そこから不動産業で大成功をおさめ、今では3棟のビルのオーナーになっている。その彼が、「お金を稼げば家族が安心して生活できると思い頑張ってきたが、お金では安心は買えないということが今回のコロナでわかった」と寂しくつぶやいたことが強く印象に残っている。これは、経済性や合理性を最優先した資本主義の象徴である摩天楼の輝く時代から、人間・動物・植物が共生する自然回帰の時代に大きく舵が切られたことを意味する。

今回のパンデミックを受け、私自身の生活も大きく変わった。子どもの学校がオンライン授業になったことと、義父が80歳を超えておりコロナ感染のリスクがあるため、マンハッタンから北へ車で8時間ほど行った、1980年冬季オリンピックが開催されたレイクプラシッドがあるアディロンダック山地の山小屋に避難した。



家族で避難した山小屋



左：山小屋の周辺には豊かな自然が広がる／右上：近くの湖／右下：山小屋の中の様子

私はマンハッタンでの仕事があるため、2週間ごとに山小屋まで食料を車で運び、そこで1週間過ごし、またマンハッタンへ戻るという生活パターンを6カ月間続けた。ハドソン川沿いを走るルート87をドライブするのだが、マンハッタンを出て1時間も走れば、いきなり風景は田園地帯となり、アメリカがいかに自然豊かな国であるかと同時に、東京を中心とした都市群が世界一のメガロポリスであることを改めて思い起こされた。

ルート87を降りると人口数千人の小さい町が続き、山道に入る頃には、野生のシカが飛び出してくるため、時速を30キロ以下に落とさなくてはならない。

山小屋生活を始めたのは3月下旬からで、朝夕は雪が降り積もり氷点下の日が多かった。5月に入ると急速に緑が芽吹き、外灯には無数の虫が集まり、ゼンマイやツクシなどの山菜が溢れていた。8月になる頃には、近くの湖の水温が急速に上がるため水泳を楽しむことができた。野菜は農家から分けてもらい、ミルクやチーズは近くの牧場から購入し、魚は川や湖で釣り上げるなど、物価の高いマンハッタンの10分の1の生活費に抑えられることに驚いてしまった。

ひょんなことから隣の山小屋に避難しているフランス人家族に頼まれて日本食を作ることとなり、川で釣ったニジマスの塩焼きと、道端に生えている山菜を摘んで天ぷらにしてみた。思いのほか天ぷらがウケて、何度も天ぷらパーティーをすることとなり、山小屋の周りに自生している山菜がなくなるほど摘みつくしてしまった。アディロンダック山地の周辺は、完全な白人エリアであり、東洋人を見かけることはほとんどないため、山菜を探し回っている私の姿は白人の目にはとても奇妙な光景に映ったと思う。フランス人家族は、「コロナのおかげで自然の中で生活する機会を得ることができた。この経験が無駄にしないように母国に帰って残りの人生を考え直す」と言い残し、帰国していった。

西洋人は、とにかく決断すると行動が非常に早い。一見、何も考えていない軽率な行動のようにも思える時もあるが、自分の直観力は論理的思考力にも勝るという自負を皆持っているように感じる。ニューヨークで成功している中国人、韓国人も同じような思考回路である。情報化が進んでいる現代においては、あらゆる選択肢に振り回され、石橋を叩き過ぎる性格の日本人は、なかなかチャンスを掴めないのではないかと思う。

私は東京生まれの東京育ちであるため、このような長期間山で過ごすことはもとより、このような自給自足の生活することも初めてであった。Wi-Fiがほとんどつながらない環境で、キツツキの巣づくりの音で目覚め、暖炉の薪が消えるころに寝てしまうという原始的な生活は、今まで経験したことがなかった。自然に包まれているという安堵感から、心から幸せを感じるようになった。

ドイツの文豪ゲーテは「なぜ私は好んで自然と交わるか」といふと、自然は常に正しく、誤りはもっぱら私の方にあるからだ」という言葉を残している。なぜゲーテ自身、自然と交わる必要性を感じ取っていたのか？ それは、自然には人間の心の根底にある無意識の世界を浄化する作用があることを知っていたのだと思う。

1月7日、東京に2度目の緊急事態宣言が発令された。このようなパンデミックの状況下であればこそ、この浄化された心により、未来への希望の光を見ることができるとは思えないだろうか。

自分とは何か、これからどこに向かえば納得のできる人生を選択することができるのか、この問いに対して、考える時間を与えてくれたパンデミックという状況に感謝したいと思っている。

南 惣一郎 (みなみ そういちろう)

1965年東京生まれ。東京工業大学大学院社会理工学研究科修了。国際結婚により2000年からニューヨークに在住。米国進出企業を対象にコンサルティング会社を経営。ニューヨーク州不動産ライセンス保有。

鶴巻和哉 氏に聞く 好きなアニメーションを つくり続ける

今回お話をうかがったのは、アニメーション監督の鶴巻和哉さん。アニメーターとして数多くの作品に携わり、テレビアニメ『新世紀エヴァンゲリオン』以降は、監督、演出家としても活躍しております。シリーズ完結編とされる映画『シン・エヴァンゲリオン劇場版』の公開を控えた鶴巻さんに、子供時代のことからアニメーターの仕事のことまで、お話をいただきました。



— アニメーターを志したきっかけを教えてください。

子どもの頃から漫画やアニメが好きで、いつも絵を描いていました。小学生の頃よく描いていたのは世界一周するための架空の船の内部図面で、ボイラー室や船長室、船員の寝室、食糧貯蔵庫などを想像しながら描いていました。「ウルトラセブン」で滝から戦闘機が飛び出てくるシーンを見て、その滝の奥には滑走路と格納庫があり秘密基地に繋がっていることを想像して山の断面図を描いたり、そんな絵ばかり描いていました。

僕は新潟の田舎出身で、小学生の時は1学年16人、中学でも40人程度しかおらず、アニメのマニアックな部分を共有できる友だちがいなかったのですが、高校生になって初めて自分よりも知識のあるオタク友だちに出会って、よりのめり込んでいきました。ぼんやりと絵を描く仕事に就けたらいいなくらいに思っていたのですが、アニメーター(アニメの作画を担当する職種)なら、完全歩合制なので1円も稼げないということはなさそうと、親に黙ったまま、東京の専門学校で資料を取り寄せ、さらに新聞奨学生に応募する手配も済ませていました。

今考えると、よく誰にも相談しないままこんな大胆な決断ができたものだと思います。親は絵の仕事なんてすぐに食えなくなって帰ってくると思っていたのでしょう。数年遊んできなさい、くらいの感じで特別反対もされずにあっさり認めてくれました。

— 専門学校卒業後、最初にどこかの門を叩いたのですか。

最初はスタジオジアイアンツという、練馬にあるアニメーションスタジオに入りました。毎週放送されるテレビアニメは、半分は元請けの制作会社がつくり、残りの半分は下請けのスタジオ数社が分担して制作するというように、ローテーションでつくることが多いです。スタジオジアイアンツはその下請けのスタジオで、「ゲゲゲの鬼太郎」や「めぞん一刻」などを担当しました。

朝の10時くらいに出社して、夜中の12時くらいまで、食事の時間以外はずっと机で絵を描いていました。

— 作品ごとに画風が違いますが、アニメーターはそれに合わせてタッチを変えて描くのですか。

どの作品も、原作の漫画とアニメーションでは絵がだいぶ違います。漫画家個人が全部描くのと違って、アニメの絵は数十人のアニメーターが手分けをして描くので、万人が描きやすいものにデザインし直されているんです。ただし、そうはいつでもそれぞれ手癖があるので、うまい人もいれば、あまりうまい人もいないし、うまいけれどすごく癖が強い絵を描く人もいます。だから詳しい人を見ると、今週と先週の絵が違うことがわかったり、CMの前後で絵が変わったことがわかったりします。

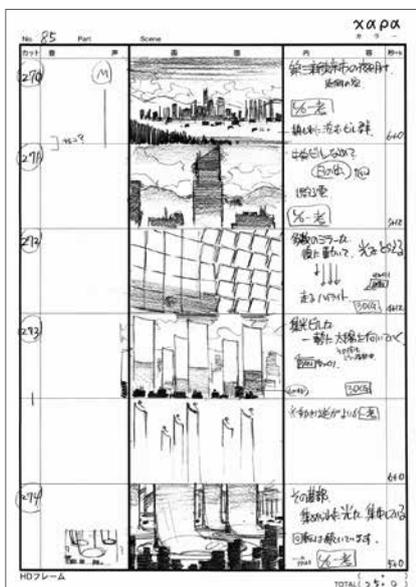
スタジオジアイアンツには4、5年いて、その後、先輩に声をかけてもらい、僕が学生時代から好きだったガイナックスという、のちに『新世紀エヴァンゲリオン』を制作する会社で仕事をするようになりました。

アニメーターはスタジオに所属していても基本的にはフリーランスなんです。なので作品ごとに人が入れ替わることも多いのですが、僕はガイナックスにいた庵野秀明(監督)をはじめ、そこで働くうまいスタッフから学びたかったので、参加したアニメの制作が終わった後も、ガイナックスに残りました。

— 『エヴァンゲリオン』シリーズは庵野さんのオリジナル作品ですが、制作が始まった頃のことを教えてください。

『新世紀エヴァンゲリオン』は、漫画よりも先にアニメとして始まった企画で、1995～96年にテレビシリーズが放送されました。僕はそれまでは単に、いちアニメーターでしたが、『エヴァンゲリオン』シリーズではアニメーターとしてだけでなく、演出や監督としても参加するようになりました。

アニメーションは監督が全体を見て、その次に監督が要求したことを、絵コンテという演出の設計図のようなものを書く部署があり、さらにその次に絵コンテをもとにアニメーターに細かく指示をする現場監督がいます。この全てを監督がこなす場合もあれば、分業する場合があります。



鶴巻さんが描いた
『エヴァンゲリオン新劇場版：破』の絵コンテ
© カラー

『エヴァンゲリオン』シリーズでは、僕はこの現場監督に当たる役割をしていて、一部絵コンテでも参加しています。当時のガイナックスは、ちょうど「ウルトラマン」や「仮面ライダー」、「マジンガーZ」、「宇宙戦艦ヤマト」、「ガンダム」あたりをリアルタイムで体験している世代が集まっていて、好きな世界観やデザインに共通認識があるので、みんなでわいわいと楽しくつくることができました。

— 『新世紀エヴァンゲリオン』は当時社会現象になりましたが、なぜそこまでヒットしたのだと思いますか。

正直にいうとよくわからないままです。少なくとも自分たちが絶対に面白いものをつくっているという謎の自信はありましたが、それがこれほど広く受け入れてもらったのは幸運だったのだと思っています。

ただし、制作当時の社会の空気や感覚を表現しようという自覚はありました。放送されたのは1995年の10月からですが、制作中だったその年の初頭に阪神・淡路大震災とオウム地下鉄サリン事件がありましたし、当時の若い人たちの感じていることや悩みをなんとか回収しようとしていたように思います。

— 日本のアニメは手描きの美学があると思いますが、CGはどのように取り入れていますか。

現在でも自動車や宇宙船などは3DCGが担当し、キャラクターは手描きのアニメーターが担当するというように、使い分けて制作していることが多いと思います。3DCGはメカニカルなものには合っていますが、キャラクターは少し堅苦しい感じになってしまいます。ディズニーなどと比べると、日本のアニメーションはまだまだそこは遅れています。

世界でも評価されている日本の手描きアニメーションの表現技術は、試行錯誤と玉石混淆の長い積み重ねの上に

かたちづくられていったものです。いずれ他とは違う日本独特の3DCGの表現をつくっていけると思っています。

— 今後アニメにどのように関わっていきたいですか。

幸いなことに、今もまだアニメ制作に関わっていればそれだけで楽しいので、役職にこだわりはありません。若い頃はお金がなかったし、歳をとってからは体力的に辛いというところはありますが、絵を描いているうちは楽しいですからね。好きなことを仕事にできているからだと思います。

ただ、仕事を始めてからはあまりインプットができていなくて、学生時代に見聞きしたアニメや漫画、小説の貯金だけで、食いつないできたようなところがあります。

最近では、子どものおかげで低年齢層向けのアニメや少年漫画などに触れる機会が戻ってきました。一緒に見ていると、とうの昔に忘れてしまっていた純粋なリアクションに驚くこともあります。そういった感覚をもう一度取り戻して大切にしていきたいと思っています。

— 貴重なお話をいただきありがとうございます。

いよいよ公開される『エヴァンゲリオン新劇場版』シリーズ完結編の『シン・エヴァンゲリオン劇場版』も楽しみにしています。

インタビュー：2020年11月11日 akimichi designにて
聞き手：関本竜太・会田友朗・中澤克秀（『Bulletin』編集WG）

PROFILE

鶴巻 和哉（つるまき かずや）

アニメーション監督・アニメーター／株式会社カラー所属

1966年新潟県生まれ。スタジオジブリに入社してアニメーターとしてデビューした後、ガイナックスに移籍。『新世紀エヴァンゲリオン』では副監督を務め、デザインや設定にも関わった。代表作にOVA『フリクリ』、『トップをねらえ2!』など。2006年、庵野秀明が設立した株式会社カラーに移籍。『エヴァンゲリオン新劇場版』シリーズでは監督を務めつつ、画コンテ、デザインワークスも手掛ける。

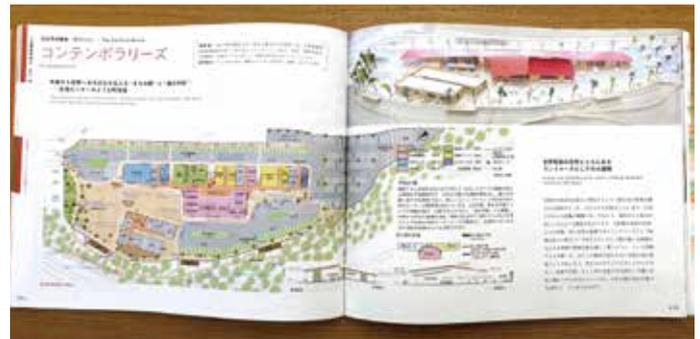
新しいコンペのあり方を求めて



柳澤 潤

2006年10月6日、その日は朝から気持ちの良い秋晴れだった。長野県塩尻市文化センターにて「大門中央通り市街地再開発ビル」、後の塩尻市市民交流センター（えんぱーく）の最終審査が市民に公開されるかたちで行われた。審査委員長は建築家の山本理顕さん、その他の審査員の構成は建築家2名、経済学専門（地方創生など）大学教授1名、図書館専門家1名、助役（現副市長）1名の計6名。応募191案からの最終選考に残った5組がプレゼンテーション15分、質疑応答15分という公開審査であった。審査は午後1時から始まり、3時くらいには終わるかと思っていたら、何度も決選投票を経て、結局6時過ぎにようやく決着がついた。結果は4対2、薄氷の勝利。東京に帰る電車の最終便にスタッフ3人で興奮気味に飛び乗ったことも昨日のこのようだ。

少し前置きが長くなったが、あれから15年、事務所としては毎年3、4個くらいのペースで公共のコンペやプロポーザルに参加してきた。参加する理由はいくつかあるが、自分の建築に対する考えを自由に表現できる発表の場であり、一建築家としてその地域や地方に貢献できることがあるとすれば、やはり公共建築しかないと思っているからである。コンペやプロポーザルに参加する時にはまずコンペの形式（オープン、指名、デザインビルド、PFI、etc.）の他に審査員の構成、コンペのプログラム、敷地、工期、コストを検討し、参加するか否かを決定している。しかしながら最近はこの審査員の構成

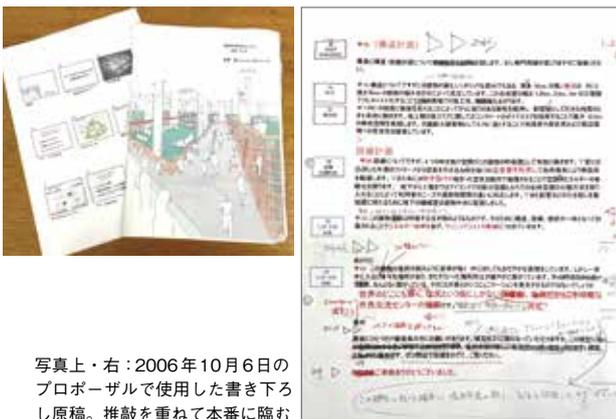


昨年参加したプロポーザル（木の園・木曾町の庁舎づくりI）の作品集、よくまとまっている好例

員に建築家が少ないことや実績重視のものが多いことが気になっている。そういうコンペやプロポーザルの結果は目に見えていて、ほぼ無難な案が選ばれる。一方、審査過程や結果も詳細に公開され、審査過程や風景をまとめて作品集にしているような自治体もある。結局のところ、良いコンペかどうかはやってみるまで分からないのである。審査員の構成が行政や学識経験者に偏っているコンペは、実績が重視される。これだけははっきりしている。

毎回慎重に応募要項を読み込み、コンペの主催者がどんな思いでこのコンペを開いたかを想像し、その土地に行き敷地と向き合い、できるだけ地元の人と会話する。さらに地元の図書館に行って郷土資料を漁り、時に役所に行って地図を買い、地元で食事をし、空気を吸って帰ってくる。多少はインターネットのお陰で情報が手に入れやすくなったとしても、この繰り返しである。そのエネルギーと考え抜いた案だけは誰にも負けない自負があるからこそ、負けた時は頭が真っ白になる。そのくらい疲弊し、困憊する。おそらくこれからもそういうやり方を貫いていくと思う。

JIA会員として今思うことは、全てのコンペやプロポーザルには少なくとも建築家（構造家、設備家を含む）を2名以上入れてもらいたい。また、経験や実績重視でなく、若い建築家も広く参加できる真の意味での開かれたコンペの開催を期待するとともに、その実現に働きかけたい。



写真上・右：2006年10月6日のプロポーザルで使用した書き下ろし原稿。推敲を重ねて本番に臨む

建築・まちづくり支援プラットフォーム宮城

—宮城県内の建築関係4団体が連携し、
中立的立場で自治体の相談に応える—



一般財団法人 宮城県
建築住宅センター
理事長
三浦俊徳

昨年(令和2年)9月に宮城県内の建築関係4団体(日本建築家協会東北支部宮城地域会、宮城県建築士事務所協会、宮城県建築士会、宮城県建築住宅センター)が連携し、市町村を中心とした自治体の公共建築整備やまちづくりの支援のための組織として「建築・まちづくり支援プラットフォーム宮城」を立ち上げました。その背景や取り組みなどについて紹介します。

背景と設立の経緯

人口減少・少子高齢化が進む中、自治体では「公共施設等総合管理計画」を策定し、公共建築の長寿命化や再配置などが進められています。また、宮城県では、東日本大震災からの復興が進む中、住民合意形成の重要性も指摘され、さまざまなかたちで住民主体のまちづくりが進められています。さらには、県民会館や仙台市役所の建て替え等大規模な公共施設の計画が進められようとしており、市民、県民意識の高まりも見せています。

一方、建築技術職員のいない小規模な自治体もあることから、公共建築やまちづくりに対する理解やスキルの蓄積等が進まず、さまざまな場面で担当者が苦慮しているのも事実です。

国においては、平成30年「発注者支援に対応する関係法人」の公表や発注者のマネジメントを補完することを目的としたピュア型CM方式の検討なども進められています。

こういった状況を踏まえ、公共建築整備やまちづくりに対し、地域の建築関係の専門家が一定の役割を担うことが重要という認識のもと、4団体が連携し、中立的立場で自治体を支援することを目的とする「建築・まちづくり支援プラットフォーム宮城」を設立しました。

建築関係の3団体は、仙台市役所の建て替え等に関して市民参加の議論の場である「ラウンドテーブル」を共同で展開してきた連携の実績があり、宮城県建築住宅センターは、自治体の公共施設整備支援が目的の1つとして設立されていることから、国土交通省東北地方整備局

の声がけのもとに研究会が立ち上がり、4団体による「プラットフォーム」を形成することとなりました。

プラットフォームとしての取り組み

地域の建築に関わる専門家として、自治体の相談に対し、中立的立場でアドバイスや提案を行うことがプラットフォームの取り組みの中心です。

市町村の担当者は、公共建築整備やまちづくりをどのように進めていくかに悩んでいたり、そういったことをどこに相談していいのかも分からず困っています。「建築・まちづくり支援プラットフォーム宮城」は、そういった相談の窓口となり、アドバイスしていこうというものです。具体的には、公共建築の構想・計画から、設計、建設、運営といったプロセスや手法、住民中心のまちづくりの手法や合意形成の方法への対応などを想定しています。

プラットフォーム立ち上げの準備段階においては、東日本大震災で大きな被害を受けた女川町から廃校となった小中学校の利活用の相談を受けて、プラットフォームとしてサウンディング調査の実施を提案し、現在進行中の案件もあります。このようなケースも含め、さまざまな相談に対応できればと考えています。

これから

プラットフォームとしては、相談へのアドバイスや提案だけでなく、先進的な事例の収集や公共施設整備のノウハウの蓄積等も図り、自治体や住民に対する中立的立場での情報提供もできればと考えています。

プラットフォームはまだ立ち上がったばかりですし、これまではなかった組織形態でもあり、市町村からの相談等に対する実績を1つひとつ積み上げ、取り組みを充実させ地域貢献を進めることで、信頼される「建築・まちづくり支援プラットフォーム宮城」を目指していきたいと思っています。

まちをデザインすることは 暮らしをデザインすること



倉田直道

一昨年、ロンドン、ニューヨークで、かつては治安が悪く荒廃したまちが再生されている様を何か所か調査してきた。これらはBlighted Area(荒廃地区)と呼ばれた地区で、歴史的には工場、倉庫、操車場など産業用途で使われていた土地や移民労働者の居住地区であったが、産業活動の変容に伴い衰退し、その状態で都市開発からも取り残された地区であり、欧米の多くの大都市に存在している。特に酷い地区はスラム、ゲットー、スキッドローとも呼ばれ、貧困・失業、犯罪、バンダリズムなど、手がつけられない社会問題を抱えた地区でもあった。1960年代にはアメリカ政府の政策としてスラムクリアランスという名の下でアーバンリニューアルが行われたが、物理的な環境は更新されたものの、フェデラルブルドーザーと呼ばれたように、それまでそこで生活していた居住者の生活やコミュニティを破壊する結果となった。ジェイン・ジェイコブスが批判したのもこうした開発であった。

今こうした悪所とも呼ばれるような地区の再生が世界同時多発的に進んでいる。そこに共通するのは、経済論理に基づく再開発ではない、多様な暮らしの価値を体現した新しい人々の活動の集積がまちを漸進的に変えてきていることである。これらの地区の多くは、低廉な家賃により、アーティストなどクリエイティブな人々が暮らし始めたことを切掛けに、IT関連やコミュニティビジネスの起業家など、若いまちづくり(活動)の担い手にスタートアップの場や個々のライフスタイルに合わせた多様な居住施設やワークスペースを提供している。提供するというより、彼ら自らがそうした場を創出、獲得しているといってもよい。

これらの地区は通常の開発から見放され、長い間放置されてきた場所でもあり、その結果、既成の社会規範からも比較的自由であり、彼らの暮らしに対する創造力(想像力)を発揮する場が多く残っている。その自由な創造力の発露である、エスニック・フード、オーガニック・フードのレストラン、グリーンマーケット、ファーマーズマーケット、世界中のコーヒー豆を焙煎して提供するカフェ、ワークスペースや交流スペースが一体となったカフェレストラン、シェアオフィス、コワーキングプレイス、アート系ブックショップ、オリジナルクラフトを扱う雑貨店、カスタム自転車店、アートスペースとアートイベント、アーティスト・イン・レジデンス、音楽スタジオやライブハウスなど文化芸術活動、歩行者や自転車車が主役の公共空間や公園等の緑豊かなパブリックスペースなど、多様なライフスタイルや生活の価値観が表出したものがまちに溢れ、古く朽ちそうだった建物を最低限りノベしたまちの佇まいと相俟ってまちの魅力を生み出している。彼らは間違いなく暮らしの場としての選択肢を自らが主体的に獲得しようとしている。アンリ・ルフェーヴルがかつて〈都市への権利〉として提唱した、出会いと遊戯の中心、参加する活動の場、使用価値が優先される場として都市空間の再生と創造、すなわち〈都市への権利〉としての都市空間を生活者の手に取り戻す都市的实践である〈まちのデザイン〉が新しい位置を獲得する時代を迎えつつあるような予感がする。一方、こうしたまちでは、土地の価値が向上した結果、これまでの居住者が住み続けられない、ジェントリフィケーションという新たな課題に直面している。



ニューヨーク・ブルックリン・ダンボ地区の風景



ニューヨーク・ブルックリン・ダンボ地区のカフェ

抱負を語る

長く作っていくこと



佐久間達也

JIAに入会した2020年春には、独立20年を迎えていた。恥ずかしながら独立当初から今日に至ってもずっと低空飛行のままであるが、やめることもできず瞬間に年月が過ぎた。あるとき、武者小路実篤の「この道より我を生かす道なし」という言葉を知って、開き直ろうと考えた。現在、非常勤講師として担当している科目の中に建築材料の講義がある。設計者が引き受ける授業は一般的には意匠に関するものであり、材料は専門ではないのだが、担当させていただいている。やってみると授業の準備は大変だが、意外にも熱中でき、遠回りながら自分の意匠にも役立つかもしれないと前向きに考えている。このように自分は純粋な建築家というイメージからは遠く、人前で建築家と名乗るようなこともしない。

建築を学ぶ学生は、おそらく設計の授業の中で、コンセプトを考えるように指導されているだろう。このコンセプトという言葉は、少し行き過ぎていると感じている。何か意図を持って特別なアイデアで作らなければならないと錯覚しそうになるけれども、人々が普通に暮らす住宅や店などの日常的な建築を思うと、そこには普通さというものがある。普通の建築とは長い歴史の上に培われたものであり、そこには誰もが分かるような建築の元といえるものが内在している。私はこの普通さという広い世界とつながっていたいと思う。その上で今の人の生活に少し情感を添える建築を考えていきたい。

力まず、何とか長く作っていければと思う。JIAに入会したからにはJIAの名に恥じぬよう、日々精進したい。



水戸の二世帯住宅

抱負を語る

今までのこと…
これからのこと…



渡辺恭祥

建築の仕事に携わり早いもので25年以上の月日が流れました。このたび、執筆の依頼をいただき、良い機会なので少々過去を振り返ってみようと思います。

幼少期を東京都下で過ごし、近所の高校に進学。何となく設計の仕事に憧れを抱き、建築の専門学校に進学しました。富士山の麓にある全寮制の4年制の学校で、「図面を見れる大工を養成しよう」と、授業も日本建築に特化し、大工技術や茶道も学ぶ珍しい学校でした。卒業後、何も考えず就職した共同住宅の得意な設計事務所で勉強し資格を取り、建築の基本と法律・実務を学びました。デザインや建築に対する考え方を学びたくてアトリエ系の事務所へ飛び込み、現代木造住宅を学びたくて自分で設計した小さな共同住宅で大工の手元もやりました。

1999年、自分の力を試したくて独立。最初の頃は下請けや申請代行業務がほとんどでしたが、徐々に自社での設計・監理業務を行うようになりました。用途・規模・構造にこだわらず、何にでも挑戦する気持ちで邁進してきました。

個人邸・共同住宅・別荘・店舗・事務所等、さまざまな建物を設計し、さまざまなクライアントに出会いました。その中で私はこの仕事で一番大切なことは「クライアントの考え・思い・理想をどこまで理解し、どこまで実現できるか、そしてどれだけ超えられるか」であると考えています。建物が完成した時、私の仕事は終わります。建物が完成した時、その建物の評価が始まります。動きや五感で感じる評価は人それぞれです。暮らしてみても使って、「やっぱりこの人に頼んで良かった」と言われる仕事ができるよう、日々精進を重ねていこうと思います。



西湖 W邸

NPO日本デザイン協会 (JDA) セミナー

個性や能力を十分に活かす社会をつくるためには

2019年2月26日にJIA館にて開催されたセミナーの記録を4回に分けて掲載しています。

登壇者：神田順（東大名誉教授）、山本想太郎（JIA関東甲信越支部デザイン部会長）、

連健夫（日本建築まちづくり適正支援機構代表理事）、大倉富美雄（進行）

共催：（公社）日本建築家協会（JIA）関東甲信越支部デザイン部会

NPO日本デザイン協会理事長

元デザイン部会長

大倉富美雄

ディスカッション

デザインや芸術が知的生産として認められていない

大倉●会場からもご意見をうかがいます。

湯本（会場）●JIA関東甲信越支部 港地域会の湯本です。

私も大倉さんが言われたように、どうも明治につくられた知的生産機関・大学等がとても偏っていて、デザインや芸術は非常に狭いところに押し込められ、知的生産として全く認められていないのではないかと思うのです。

さらに遡ると、江戸時代には新規御法度といって、幕府の体制を脅かすような新しいことをしてはならぬというものがあり、明治には富国強兵が優先され、今に続く現代日本社会の中に目に見えにくい規制など邪魔するものがたくさんあって、うまく進まなくなっているのではないのでしょうか。

社会の中にある障害や規制を具体的に掘り起こして対策を論じていただくと、より分かりやすくなると思いますし、さらに日本の教育の体制や、政治体制についても話を聞いてみたくなりました。

神田●さらなる議論を期待されているのですね。

大倉●ご意見ありがとうございます。

人為でルール化されたものは簡単に変えられるはず

神田●ところで、大倉さんのお話にあった「知的感性経験力」は誰の言葉ですか？

大倉●私の造語です。

神田●正直、何を言っているのか分かりません（笑）。

けれど、感覚として思ったのは、知的生産が軽視されるようになっていったのは1970年から今日までということです。もちろん明治時代に、列強に対してどうしようという話は当然あるのですが、その時はある意味、列強と対等にやってきた。その後、対等じゃないのに戦争して負けたわけです。

しかし、科学や芸術の議論は1900年代も同じようにされていただけで、今、我々が議論しているようなことも100年前だって議論していたと思うのです。

感性みたいなものがどうやって育つか、知的なものがどうやって育っていくのかという話と、今の規制社会の中で専門家がどういう役割を果たしていくのかというのは、少し違うような気がしました。

例えば、経済指標をお金で計る、しかも地域通貨ではなく国が発行した通貨で、資本経済の中で国が価値を決めるのはとても分かりやすいわけです。同じように、教育現場では偏差値を決めて、偏差値の中で大学がランク付けされ、その中で企業も採用人事を行っている。東京大学に入学するために、偏差値を上げる訓練をやってきた人たちが政治家になる。なってもきちんと分かってやってくればいいのですが…。非常に分かりやすい尺度だけで単一にやってきたところがほころんでいるのに、そういう仕組みだけでお金を廻しているところが潤っている。金と偏差値みたいなかたちに日本の社会がなっているのです。それは明治の時につくられた仕組みではなく、この30～40年の話です。だから、30年も掛けなくてももっと簡単に変えられると僕は思います。

理念とルールはセットで提示する

山本●湯本さんの「目に見えにくい規制がある」ということもそうですし、神田さん、大倉さんのプレゼンテーションも同じ観点を持っていて、結局、日本の社会が理念のないルールや制度のようなものに縛られているのではないか、ということだと思のです。確かに、明治に入ってきた「脱亜入欧」みたいなものに、わけの分からない縛られ方をしているという実感は私にもあります。そういう現実から見ても、我々を縛っている規制やルールを一括りにするものではないと思っています。それを分類しはじめると大変なのですが……。

先ほど、建築基準法には理念の提示がないという話をしました。その良いところは、自明でない理念は押し付けられないところですが、神田さんがおっしゃっているように、理念がないと何だか分からないものが押し付けられてしまう側面は確かにあると思います。しかしそこから注意が必要なところで、理念のないルールの危険さと、

ルールのない理念の危険さは、実は同じだと思うのです。

最近、いわゆる基本法、理念法みたいなものはたくさんできています。それらは理念を提示するけれど罰則のようなルールはあまりありません。「ヘイトスピーチ規制法」などはまさに典型的な例で、「ヘイトスピーチはいけないのですよ」と言っていますが、罰則というルールはない。これに対し、川崎市は「ヘイトスピーチ規制法」に基づいて公共施設の使用を拒否したり、定義も判断も曖昧な「ヘイトスピーチ」に刑事罰を与える条例を独自につくったりしました。

ルールのない、あるいは曖昧な理念は、それこそ権力に利用されかねないと思うのです。だからこそ、ルールと理念はセットでなければなりません。セットであれば、そのルールは当然価値観を押し付けるという側面をもつことにもなります。

先ほど、芸術の感性の価値と、知的生産への社会的認識の間にギャップがあるという話もありましたが、ギャップがあって当たり前です。芸術的創造行為というのは、既成の価値観に対する破壊を意味するものですから、現行の社会システムと合致し続けるはずがありません。むしろそのギャップが生じている状態こそ正常で、理念が押し付けられるからこそ、それに対する破壊という創造も生まれてくるといえるでしょう。

実は、我々がもやもやと不安に感じているのは、そのギャップによる衝突がきちんと発動していないということなのではないでしょうか。例えば日本のアート市場は、世界の先進国でも最小レベルです。日本のアーティストの価格相場も日本では決められないくらいに小さい市場です。それは、我々が理念のないルール、あるいはルールのない理念の中で過ごしているという弊害なのかもしれません。ルールの背景にある理念に反対したり、破壊したりするような欲望が生まれにくい状態になっているということです。

ですから、もし「建築基本法(仮)」をつくることになるならば、理念のみを提示するものではなく、理念とルールがきちんとセットになっていることを希望します。

神田●要は建築基準法が全国一律なのが問題なんです。建築は本来地域のもので、ルールは地域でつくったほうがいい。全国一律で理念とルールをつくってしまったら、大企業、大量生産の人には有利でも、地域でやっている人には非常に不利になる。だから「基本法」の理念の部分は、国でつくる代わりに、ルールや規定の部分は地域でつくりましょう、というのが狙いなのです。

「資格を取れば専門家」、という「自己責任」もない

連●2000年に交付された地方分権一括法はひとつのチャンスです。地域の条例でさまざまなことを決めることができるようになってきました。しかし、それがまだまだなのは、地方自治体が自分で責任を持ちたくないと思っているからです。今日のシンポジウムで大切な視点は、「自己責任」の話と、「どこまで裁量を入れていくか」ということだと思うのです。

例えば先ほどの話で言えば、日本だと建築士資格がないと確認申請が取れません。一方イギリスでは誰でも許可申請を出せますが、建築家、つまり専門家に頼ります。ちゃんとした人に頼もうという意識があるのです。これは「自己責任」ですよ。つまり、経験の積み上げということで、なるべく規制をつくらないようにしている。裁量と自己責任ということ、今後考えていく必要があると思います。

神田●責任という言葉は便利な言葉で、建築基本法の中では、建築主に自己責任ということを行っているのですが、逆に言うと、弱者に自己責任はすごく酷な話です。

今は、福祉も教育も弱者に自己責任をと言っています。やはり1,000㎡の空間をつくる人には自己責任があるのと同時に、10,000㎡の建築をつくる人と、200㎡の家をつくる人は社会に対する責任のレベルが違う。そういうことを社会が受け入れるべきです。ということは、それを許可する人にも責任がある。ルールを型通りやっておいて、責任を取らなくていいというのが日本型規制社会としてできている。その中で、力のある人がきちんと顔を出して責任を取る、という社会にすることじゃないかと思うのです。

建築の社会でいちばん難しいのは資格の問題ではなく、法律の中で一級建築士でなければできない仕事はたくさんあるけれど、それは法律を適用できる資格者に過ぎず、プロフェッショナルではないということです。

社会に対して建築家がどのように役に立つのか、建築家協会は建築士会ときちんと議論してほしいです。一般の人も、建築士ということで頼むのか、建築家ということで頼むのかで言葉も変わるし、しきりも変わってくる、ということかなと思うのです。

客体性の上に生きることと、主体性に還ることの差

大倉●先ほど神田さんが、私の「知的感性経験力」を分からないとおっしゃいましたが、言葉に対する感性が皆少しずつ違うので仕方がないですね。結局、言葉でコミュニケーションし、言葉で法律をつくるのですから、そのあたりの難しさを感じました。私は美術大学出身で絵ば

かり描いていて、ある時期まで言葉を信じていませんでした。しかし社会に出たら全く無能で役立たずで、慌てて言葉の勉強をしました。今も言葉を捜している状態です。

感性の違いは人間のバリエーションであり、特に建築家やデザイナーは、感性和理性の間であって、思考を客体性の上に立てようとする人と、主体性の上に立とうとする人との間に散らばっているから難しい。前者は一般に科学者や工学系であり、論理としての言語や数字で考えることに長けており、後者は芸術系などで、視覚や体感で考えます。そこを私は気にしているのですが、「知的感性経験力」もそこから出てきた言葉です。

ところで、「知的生産」という言葉を出してくださったのは仙田満さんで、今日来ておられるので少しお話しただけですか。

「知的生産者の公共調達に関わる法整備」について

仙田(会場) ●私は知的生産者の公共調達に関わる法整備について、6年くらい学術会議を中心に取り組んできました。日本では知的サービス、知的生産の公共調達の時に、会計法において対価の競争を原則としています。これを何とかしないと次に進めないのではないかという結論に立ち、この岩盤といわれる法律を何とか変えていきたいと思って行動し、政治的にも働きかけています。

今日の神田さんの、建築基本法(仮)が必要だという考えに共感しているのですが、建築のみならず、知的生産者選定の問題点を除去して、それから日本の知的生産の価値を上げないと展望が開けないんじゃないかなと感じています。

建築という分野だけではなく、造園設計、土木設計はもちろん、知的生産としてデザインやコンサルテーション、翻訳、グラフィック、あるいはプロダクトデザイン等の領域の発注が対価の競争を原則にしているところを変えていきたい。そうしないと、知的生産行為そのものの価値を上げられませんか、日本の文化そのものも展望がないのではないか。この展望を開いて、次の世代に引き継ぎたいと願っています。

公共調達の知的生産者が設計分野だけでなく、もう少し広がっていければと思っています。いわゆる国土交通省マターでなく、経産省、文科省、文化庁等、あらゆる知的生産に関わる省庁に係る会計法をぜひ変えたいと考えています。

大倉 ●ありがとうございます。まだまだご意見のある方もいらっしゃると思いますが、本日はこのあたりで終わりにさせていただきます。(セミナーはここまで)

さいごに

—人は何のために生きているのか？

—日本人は、死から立ち上がる生について、一体どのくらい真剣に考えているのか。

日頃の事務手続きばかりに追われ日が暮れて、気がついたら、もう自分の生命の終わりになっていた……、なんて現実を思うと、ぞっとするのが普通だろう。この国は、それを気付かせないような社会の仕組みになっていると言えよう。コロナ禍の今だからこそ、この感覚は現実のものとなりつつある。

個人としての生存の核を持たないとも思える我々日本人は、押し付けられる既得の体制(核)に流されやすい。「これが現実だ」と受け入れている人が多ければ、当然それが「現実」となる。しかし、それは我々が本当に求めているものかどうかの検証をしていない。生きていることを慈しみ、個人の個性や能力を十分に活かす社会は、我々が検証してつくれるはずだ。

そのための背景と対策を知るのがこの企画の狙いだが、追い詰められた建築家たちが話す分、それだけ深刻だが、置かれた職能事情からの発想から抜け出て、具体的な一般社会問題としての解決策に還元するのはなかなか難しいようだ。

神田さん、山本さんがネグリヤアガンベン、エスポジトを語っていた時に、彼らの言う「生」の政治や生活が、何を本質的に問題にしていたのかを考えていたわけだが、そこに個人の「生への主体性」を問う大きな触媒の役を果たしたのが、第二次世界大戦だったのではないかという予感を助けてくれそうな記事に出会った。

主題をさらに掘り下げることになるが、それは『高村光太郎の戦後』(中村稔著、青土社)という著書への評で、「自らの『愚』究明する表現人の責任」(『朝日新聞』2019年7月20日付)と題し、石川健治東大教授(憲法学)が次のように語っている。

「19世紀ドイツの法学者ゾールケは、普仏戦争開戦直前の首都ベルリンで、『共同体の精神が、原始の力で、ほとんど官能的な形象を伴って我々の前に発現し、…我々の個としての存在を感じさせなくなる』経験をしたという。

同種の体験が日本では、共同体精神の特権的な表現人であった天皇を、表象として用いて語られる。

たとえば、真珠湾攻撃の一報をきいた体験を、詩人・高村光太郎は次のように回想している。『…昨日は遠い

昔となり、／遠い昔が今となった。／天皇あやふし。／
ただこの一語が／私の一切を決定した。／…私の耳は祖
先の声で満たされ、／天皇が、天皇がと／あへぐ意識は
眩いた。』(『暗愚小伝』から)

以降の高村は、共同体精神の卓越した表現者として、
戦争を鼓舞する詩を書いた。少なからぬ若者がそれに励
まされて死地に赴いた」

「戦後派としての彼らがそれぞれに格闘した『日本』と
いう問題は、……時局への加担者として『二律背反』に
苦しんだ高村によっても、真摯な反省の対象となってい
た。自らを『愚劣の典型』とみて、『この特殊国の特殊な
雰囲気の中であって、いかに自己が埋没され、いかに自
己の魂がへし折られていたか』を究明した高村の作業は、
『暗愚小伝』を含む詩集『典型』に結実した」

ここから我々は、あの時代、そして今が、日本人をど
う規定しているのかを感じ取り、推定することが大切で
あろう。

でも改めて、なぜこのくだりを引用したのか。

討議の中でも言ってきたが、我々の脳裏には、現実
に対して知的に対応できる部分と、知的分析力だけでは、
どうしても体の動きが取れなくなるような領域がある
と思われる。一番「体に響いている職能」の一つが建築家、
あるいはデザイナーや、ある種のアーティストだろうと
の想いがあり、この後者の現実感の例を高村に見たよ
うな気がしたからだ。これが「理念」に繋がる。

もちろん、天皇と建築基本法(仮)を同列に語ること
ではない。そこにある、人間性の偏在性を承知の上で、法
規制の問題(「ルール」化)を組み上げていくことだと思
う。

方策を立て、具体的行動に出るためには、前者の知的
能力も絶対に必要である。

実は、建築家を含め多くの近隣分野の専門家には、こ
の両者を人間存在の根底から見つめ、うまく繋ぎ合わ
せる能力を持つことはとても簡単ではないと思われ、その
難しさがこのセミナーでの討議の有効さを物語ってく
れたようにも思う。

我田引水のように、「難解だが、有意義」。

この国では、もし創造する個性の民意の形成と納得が
難しいなら、建築家やデザイナーの知的資産(または専
門性)を保護し、適正に法整備化することが絶対に必要
である。

このセミナー記録によって、今回の討議の持つ意味
の本当の深さを追体験し、その本意を実践に結び付け
る同志が増えれば、願ってもないことだと思う。

(大倉富美雄)

関連書籍紹介



イタリアン・セオリー (中公叢書)
岡田温司著

B6判 269ページ
発行：中央公論新社、2014年

生政治、神学の世俗化、否定の思考。この三つ巴こそがイ
タリアン・セオリーの最大の特徴である。アガンベン、ネ
グリ、エスボジト、タフーリらの思想が描く、イタリア現
代思想の生きて脈打つ軌跡を辿った1冊。
本セミナーでは、ここに記された「イタリアン・セオリー」
を核に、日本の現状を考えた。



**持続可能社会と地域創生のための
建築基本法制定**
建築基本法制定準備会編

B6判 212ページ
発行：A-Forum出版、2020年

建築が、50年、100年先を見据えた持続可能社会にふさわ
しい豊かな社会資産として維持形成していくために、これ
からの建築の道しるべとなる「建築基本法」について、その
必要性を解説した1冊。

登壇者



大倉富美雄
NPO 日本デザイン協会理事長
JIA 関東甲信越支部デザイン部会
元部会長



神田 順
東京大学名誉教授



山本想太郎
JIA 関東甲信越支部デザイン部会
部会長



連 健夫
日本建築まちづくり適正支援機構
代表理事

交流委員会 Aグループ

コロナ禍でのグループ活動

—協力会員アンケートを実施—



交流委員会
法人協力 A グループ
三谷セキサン株式会社
賀川昌一

グループ活動報告の執筆依頼を受けましたが、2020年はコロナ禍で「見学会」は計画することができず、「ゴルフコンペ」は中止、会議は「Web会議」が主流で、その後のお楽しみ「懇親会」は当然なし。本当に活動らしい活動をする事ができない1年でした。働き方改革でスタートした時差出勤等々が、いつの間にかコロナ対策となっている企業も多かったのではないのでしょうか。

交流委員会Aグループでは、グループ内の会員企業に対してコロナ禍の状況をたずねるアンケート調査を行いましたので、それぞれの取り組みを報告いたします。

Aグループ協力会員アンケート(2020年12月中旬での状況)

①業務形態について

時差出勤の推奨やテレワークの実施、出勤率50～75%以下が主でしたが、100%出勤している企業もまだ多くありました。事務所内では各社アクリル板等を使用して工夫しているようです。

②飲食関係について

飲食を禁止している企業はありませんでしたが、飲食するとしても少数者がほとんどで、接客を伴う二次会等は禁止となっていました。また、社内の会食で大多数のものは禁止という企業も多く、なかには、会食はすべて禁止している企業もあり、おおむね自粛モードです。

飲食店を利用するとしても、「感染防止ガイドライン」を遵守している旨の掲示がある店に限るなど、3密を避けながら基本のようです。

③営業形態について

営業先(得意先)に対しては、客先に配慮した上で訪問している企業が圧倒的でした。Webで対応しているところも数社。また不要不急の出張を控えるなどといったところもありました。

④グループ員個々の状況

参加しているグループ員は上席者が多いため、ほぼ出勤している方が多く、通常とあまり変化がないように見受けられました。その代わり、時差出勤などで対応しているようです。

⑤その他

テレワークの規定制度化、LINE WORKSを利用したコロナ関連情報の社内共有、Web会議の推奨等々、ネット環境の中でいろいろな対応をしている企業が多く見受けられました。

以上が交流委員会Aグループ会員各社の取り組み状況です。



Aグループ内のWeb会議の様子

最後に、個人的な経験談(おまけ)でお茶を濁させていただきます。

私事ですが、福井を根城にする単身赴任者です。去る2020年10月末に所用で福井の自宅に帰りました。自宅の車庫に車を入れ、ポチポチ家に入ろうとした時、足元を過ぎて行く黒い影! よく見るとなんと約1mの成獣のクマが四つん這いで車庫の奥へ。追い出そうとすると「ハーハー」息を荒げて私の方へ……。とりあえず妻を家の方へ向かわせ、クマと格闘(?)、何度か足元を爪で引っ掻かれましたが、傷は浅く食い込みもなし。スーツは泥と爪の引っ掻きでアウトでしたが、噛まれなくて良かった……。ああ怖かった……。

5分ほどのクマとの格闘劇でしたが、勝てるわけもなく、ウィリー・ウィリアムス(空手家)は凄いと思う今日この頃でした。



交流委員会 Eグループ

2020年のJIA活動を振り返って

—正会員と協力会員を結ぶ、
オンライン技術セミナー実施に向けて—



交流委員会
法人協力Eグループ
代表幹事
株式会社きんでん
若佐明継

本来であれば、日本中が熱狂の渦の中で東京オリンピックが華々しく開催される予定でしたが、年初からの新型コロナウイルスの影響で延期となり、4月には緊急事態宣言が発令され、社会人として営業を始めて32年、初めて3ヵ月あまりのテレワーク業務を経験しました。

緊急事態宣言が解除され通常通り出社したのですが、今までの、人との繋がりを大切にし、いろいろなかたちで人との接点を増やしながら行う営業ができなくなり、これまでの常識が通用しない世界になってしまいました。

多人数の会合や会食が原則禁止になり、ご了解を得ていない訪問はできなくなり、オンラインによる会合やセミナーが主流になり、3密という言葉が流行語になってしまいました。この新型コロナウイルスがもたらした影響は、日本経済(世界経済)にもいろいろなかたちで影を落とし、従来の常識を改め、従前からの営業スタイルを転換せざるを得なくなりました。

また、JIA関東甲信越支部交流委員会Eグループの活動も、グループ会議はTeams会議に変更しました。恒例の屋形船による視察会やグループ内の懇親会はすべて中止となり、支部のイベントも軒並み中止になったことで、正会員との交流を目的とした懇親会もなくなりました。結果として、支部での部会活動やEグループとしての活動がほとんどできない状況になってしまいました。

このような状態が続けば、協力会員としての入会意義が薄れてしまい、退会等の事態になり兼ねない状況です。そこで交流委員会では、相野谷交流委員長が中心となっ

て、正会員と協力会員との接点を“オンライン技術セミナー”というかたちで結びつけ、それぞれの企業が営業活動を行えるためにも、委員会活動として交流委員会として実施に向けて動き出しました。

私たちEグループは、電気工事会社・蓄電池メーカー・防災メーカー・照明メーカーで構成されており、交流委員会が推奨する“オンライン技術セミナー”を各社の営業活動の一環として組み込んでもらうために各社に働きかけ、入会継続している意義を改めて創生しようと動き出しました。

オンラインセミナーを開催するにあたって、単なる会社の新製品紹介セミナーでは正会員の方々に視聴してもらうことは難しいと考え、それを解決する打開策の1つとして、内容は勉強会の側面を前面に出し、CPDの申請を行い、多くの正会員の方々に視聴してもらえるようにグループ内で議論を進めています。

2020年度はコロナ禍の中での経済活動を経験しましたが、新型コロナウイルスがワクチンなどで終焉に向かったとしても、また新たなウイルスが蔓延するかもしれません。そう考えると、コロナ禍での考え方や働き方は、コロナ禍での生活形式が基本となることを思慮すると、すべてが前の通りになるとは思えません。

コロナの影響で時代の流れが急速に早まりましたが、日頃の営業活動やJIA活動において、その時代で何が一番良い考え方なのか、昭和の人間ですが頭を柔軟に切り替えて、新しい時代の行動を目指したいと考えています。



毎年恒例だった「納涼屋形船施設見学会」や懇親会も2020年度は中止になりました。こんな会合が再び行えることを願っています。(写真は2019年時)

わたしの愛用ツール

建設現場やオフィスで、皆さんはどんなツールを使っていますか？「わたしの愛用ツール」では、皆さんが普段仕事で使っている愛用品やマストアイテム、人に薦めたくなる便利なツールなどを紹介します。今回は、重い荷物を運ぶ時に最適なカバンと、簡単に動画を作成できるツールを紹介していただきました。



意匠チタン営業マンの快適移動ツール Pathfinderの旅行用カバン

ちけん
知見徹摩



左から、5泊以上、3泊以上(Pathfinder)、2泊以内(RIMOWA)



最小容量



最大容量

意匠チタンは需要規模が小さく、世界中が営業担当範囲なので出張が多くなる上に、現物サンプルは必須アイテム。重いサンプルを持ち安全に行動できる旅行用カバンは、私の重要な旅の友である。

チタン最大の特徴は構造発色で、色差境界線がないため代表的な色見本でも130を超え、通常20種類程度のサンプル片を持参し、出張時には200枚以上のチタン片をカバンに入れ、空港では「HEAVY」のタグがつけられることになる。キャリアケースの走行性能は仕事の成功の鍵を握っている。

これまでたくさんのキャリアケースを壊してきた結果、パスファインダー(Pathfinder)に行き着いた。いくつかの航空会社でも正式採用されているブランドである。少々重い重量級荷物を入れても滑るように走行でき、ハンドルが頑丈で伸ばしても折れ曲がることのない。これが折れ曲がると税関で止められる確率が高い(自説)。人相の問題だと噂されてきたが、Pathfinderにしてからはスムーズに通過!! マチが拡張して容量が50%も変化できることも快適移動の重要ポイントだ。

そのカバンに必ず入れている携帯用ウォッシュレットも隠れた必需品で、海外の手洗い事情を知った子どもたちが父の日にくれた秀逸な一品。単3乾電池1本で2週間以上使え、仕事に集中できる。さすがにこれの現物写真は載せにくいのでWebサイトでご確認を。

(日本製鐵)

プレゼンテーション動画制作に欠かせない 「Twinmotion」と「InShot」

村田行庸



動画制作ソフト「Twinmotion」で作成した動画をスマホアプリ「InShot」で編集

4年前より、作図をAutoCADからBIMツールArchicadに移行し、顧客へのプレゼン訴求力が格段に良くなった。それまでは、2D-CAD図をもとにカットバースを外注依頼したり、手描きスケッチで色鉛筆で軽く着色したり、さまざまな手法を試みていた。しかし、常に設計は変更していくもの。その都度直していくのは骨の折れる作業であった。

BIMに移行して特にプレゼンの受けが良いのが動画である。敷地全体から、歩く目線で外観・内観と1、2分程度で案内できる。もちろん、BIM-xによるウォークスルーも効果的だが、準備と操作に手間取ることもある。その点、動画ファイルであれば、どのPCでも見る事ができる。しかも、BGMや効果音が盛り上げてくれる。

あるスポーツ施設の記者発表会見で動画を披露した。BIMの3Dモデルは設計時には完成しているの、動画を作成した時間は半日ほど。BIMソフトと互換性のあるレンダリングソフト「Twinmotion」で映したいカットをたどりながら、カメラ位置をセットしていく。そして、完成した動画ファイルをスマホに移し、動画編集アプリ「InShot」で効果音とBGMを入れてリサイズする。しかも、どれも無料で使えている。

プレゼンテーションの勝負時のわたしの愛用ツールです。

(アライ設計)

悦楽と癒し

50を前に思うところあり、遅まきながらJIA近畿支部に入会してまだ1年足らずの新参者です。私の趣味と言いましても、「hobby」というよりは遊興にふける「道楽」といったゆるい世界になります。

若い頃から(本業をおざなりにして……)何か自身に形を与えたいと、さまざまなものに手を付けてきましたが、何を始めてもまあ続かない……。そんな生来の面倒くさがり屋の私でも何となく続けてこられたのがバイク(オートバイ)でした。

バイクが趣味といっても、人それぞれ楽しみ方やその流派は星の数ほどあります。走り屋派、カスタム派、コスプレ派、コレクション派など、枚挙にいとまがありません。

私の場合は、バイクとともに彼方を目指すツーリング派といった類になります。この志向性も年齢とともに変化してくるのがバイク乗りの特徴かもしれません。若い頃はいわゆるカスタム派で、共同体意識をくすぐられ同種のカスタムバイクでつるんで走ったりもしましたが、年齢とともに興味の矛先も変わり、バイク単体よりも乗ることに伴うプレジャーの方に対象が移ってきたようです。

これまで乗り継いできたバイク遍歴は、一貫して「空冷2気筒エンジン」で、カワサキの並列、BMWの水平対向、ドゥカティのL型と乗り継ぎ、今はモトグッツィの縦置きV型エンジンが相棒です。エンジンの味わいや楽しさは、それぞれに滋味深い



相棒のMOTO GUZZI(モトグッツィ)

ものがあり語りつくせませんが、特性や設計思想を肌で感じながら、空を飛んでいるような解放感を伴いつつ、美しい街道を駆け抜ける喜びは、バイク乗りだけに与えられた悦楽と癒しの境地といえます。

まだ見ぬ美しい自然のきらめきや風の薫り、地域の風土とともにある美しい建築までの道程を想うだけで心が弾んできます。GoogleMapに記した「行ってみたいリスト」の緑旗はますます増えるばかりです。(金山大)

最近のはまりもの

- いかに快適にオンラインに接続するかを日々追求しています。どんどん増えるガジェットの数々…まわりからも呆れられています。(関本)
- 「麒麟がくる」。大河ドラマには興味がなく、数十年見てなかったが、歴史の脇役が主人公という斬新な設定にはまり全編見ってしまった。(中澤)
- 家飲み充実度向上策として、My包丁に家庭用ワインクーラーなどでレストラン化、食材は業務用取り寄せサイトをフル活用。(知見)
- 地下鉄の窓全開の昨今、外出のおともはノイズキャンセリングヘッドフォン。目を閉じ音楽に浸る。たいてい1駅は乗り過ぎてる。(会田)
- 今まで何度か育てては枯らしてしまった観葉植物。今回は枯れずに育ってくれているので、なんとも愛おしく癒されています。(青木)

編集後記

- 4寸角の小さなチェス盤(ドイツ製木工製品)を挟んで娘との対戦。お互いに好きな酒を飲みながら静かな時間が流れます。(市村)
- オンライン講演会、リモート卒業設計コンクールの機材や方法をネットやYouTubeで検索しまくりました。それからやっと解放されました。(吉田)
- サブスクリプションにより映画見放題。今まで見たかった映画を次から次へと見つけてしまうので、自粛の強い味方です。(長谷川)
- 外食することが少なくなり、休日にはスキレットで好きな魚介類を入れてアヒージョを作ってたたりとすることが定着してきた。(望月)

編集 : 公益社団法人 日本建築家協会
関東甲信越支部 広報委員会

委員長 : 市村宏文
副委員長 : 中澤克秀
委員 : 会田友朗・吉田 満・望月厚司・関本竜太
編集長 : 会田友朗
副編集長 : 関本竜太
編集ワーキングメンバー : 広報委員+長澤 徹・中山 薫・有泉絵美・八田雅章・青木律典・長谷川理奈・立石博巳
編集・制作 : 南風舎

Bulletin 287 2021 春号

発行日 : 令和3年3月15日
発行人 : 大西摩弥
発行所 : 公益社団法人 日本建築家協会 関東甲信越支部
〒150-0001 東京都渋谷区神宮前 2-3-18 JIA 館
Tel : 03-3408-8291(代) Fax : 03-3408-8294
印刷 : 株式会社 協進印刷

■ JIA 関東甲信越支部関連サイト一覧
・(公社) 日本建築家協会 (JIA) <http://www.jia.or.jp/>
・ JIA 関東甲信越支部 <https://www.jia-kanto.org/>

■ 定価 300円+税/会員の購読料は会費に含まれています。

© 公益社団法人 日本建築家協会 関東甲信越支部 2021

Shoqokei 50



□ 原寸大

極小のフォルムで最大の効果

φ50 Small Downlight Collection

機能・配光・色温度 213アイテム



DAIKO CHANNEL

GLARELESS DOWNLIGHT
グレアレスダウンライト

BASE DOWNLIGHT
ベースダウンライト

GLARELESS WALL WASHER DOWNLIGHT
グレアレスウォールウォッシャーダウンライト

GLARELESS UNIVERSAL DOWNLIGHT
グレアレスユニバーサルダウンライト

UNIVERSAL DOWNLIGHT
ユニバーサルダウンライト

GLARELESS DOWN SPOTLIGHT
グレアレスダウンスポットライト

DISPLAY DOWNLIGHT
ディスプレイダウンライト



ディスプレイユニバーサルダウンライト



LZ
Lighting Zero for Professional

店舗・施設用総合カタログ

LZ

Lighting Zero for Professional 2020

大光電機株式会社

商環境営業部[施設営業部]/Tel.(03)5600-7793 Fax.(03)5600-7794
〒130-0026 東京都墨田区両国4-31-17

DAIKO
<https://www.lighting-daiko.co.jp>